

---

# The world of game

涼風 蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The world of game

### 【Nコード】

N83340

### 【作者名】

涼風 蒼

### 【あらすじ】

世の中なんてつまらない。

全ては大衆化した社会だ。

そこから逸脱してしまったら、それは異常者にしか見られない。

だから僕は、引き籠ることを選んだんだ。

---

世の中をつまらないと思い、引きこもっている主人公・西園寺龍也は唯一の遊び道具だったゲームを通じて異世界へと連れて行かれる。しかし、そこで三人の仲間と出会い、龍也は忘れていた何かを取り戻していく。

これは、そんな物語。

## 序章（前書き）

残酷な描写はのちほど出てきます。一応警告表示をさせていただいていますが、そこまで残酷にした覚えはありません。

## 序章

暗い部屋を照らすのは、唯一ついているテレビの光のみ。最初のうちは目がチカチカして見辛かったが、それも数日の間のこと。今では愛用の眼鏡をかけても平気になった。

ヘッドフォンから聴こえる音楽に乗りながら、部屋に散らばったゲームケースを漁る。そのときゲームの起動音が聞こえた気がした。ヘッドフォンを肩にかけ、テレビに目をやった。

“ 現世を見捨てる気はあるか？ ”

テレビの画面には、そんな文字が浮かんでいた。眉間に皺を寄せ、僕はスイッチを切った。

「あれ？」

しかし、ゲーム機は起動したまま消えなかった。何度もスイッチを消してみるが、どうやっても消えない。コントローラの3Dスティックを動かしてみるが、反応しなかった。

「壊れたか？」

最悪な状況を思い浮かべ、顔を歪ませる。ゲームだけが唯一の遊び相手だったのだ。こんな絶好の遊び道具を失ってたまるか、と思いつながら、僕は必死になってゲームを弄っていく。

「くそっ」

どうあがいても直りそうもなく、おもいつきり舌打ちした。再び目を画面に向けると、そこには先ほどの文字の下に“YES”と“NO”が追加されていた。念のためもう一度コントローラを動かしてみるが、全く反応しない。恐る恐る“YES”に人差し指を置いてみた。

「うわっ！？」

すると画面が光り出し、あまりの眩しさに目を瞑った。どこかに

吸い込まれていく。微かに目を開こうとしたが、一向に衰えない光に目が眩み、何も見えて来なかった。為す術もなく、僕はテレビ画面へと吸い込まれていった。

（耳が痛い……）

そう思い、目を開ける。するとそこは一面に一杯の青色が広がっていた。しかし、何故耳が痛いのだろうか。

漸く戻ってきた体の感覚で、自分が落下していることが分かった。あまりの出来事に悲鳴すら出てこない。頭から逆さまに落ちていることに気付き、無理矢理体を反転させた。風の抵抗力が体を鞭打つように叩いていく。その痛みに顔を顰めるが、先ほどのように目を開けていられなかった。吹き付ける風のせいで、開こうとした目は反射的に瞑ってしまう。両腕で顔を守るようにクロスさせ、何とか目を開けるようにしてみた。しかし、開けたのはほんの少しだけ。それでも地上を一瞥出来た。緑に挟まれた青く細長い線。それだけしか分からなかったが、その高さから恐怖を感じないわけがない。僕の体は衝撃に備え、背中を丸めた。

「っ」

ギョツと唇を噛みしめ、目を瞑った。

「がつ！」

激しい痛みが一気に体を駆け巡った。丸めた体はバネのように伸び、打ち付けた箇所は悲鳴を上げている。朦朧とする意識の中で目をつつすらを開けた。

（み、ず……？）

耳が音を捉えない空間。水泡が上っていく。悲鳴が出たときに開かれた口から大量の水が体内に押し入ってくる。息が続かず、大きな水泡を吐き出すと、そのまま暗闇へと落ちていった。



## 序章（後書き）

もともと携帯で書いていたものなので、パソコンに書き起こした際、微妙に変な書き方になっているように思えますが、そこはあえてスルーしてください！

まだまだ未熟者ゆえ、背景描写やキャラの特徴をうまく出し切れず、歯がゆいのですが、これから成長していくことを願います。。。

誤字脱字や感想など、何かあれば送ってやってください。  
送ってくださると、両手を広げて喜びます！！

こんな奴ですが、どうぞお手柔らかにお願いいたします。

## 第一章

ハッとして目を覚ませば、僕を覗き込んでいる六つの目と合った。  
「うわっ！」

ビククリして体を起こしたら、三人も驚いて飛び退いた。彼らを良く見回すと、普通の人間ではないのが一目瞭然で分かる。三人のうち一人は狼のような灰色の毛に覆われた耳を持ち、両足は裸足のままだ。両肩から出ている腕の所々にある小さな擦り傷が目につく。一人は女の子らしく、先ほど目深に被っていたフードが取れ、綺麗な金髪が風に靡いていた。それ以外はフード付きのコートに隠れているので良く分からなかった。そして後一人は猫のように背を丸めて僕を威嚇している。その少年の頭にも猫の耳らしい真つ黒なものがあつた。どの子も十二歳ぐらいを思わせる幼顔の少年少女。

僕らは、無言で見つめ合っていた。一人は睨んでいるけれど。

「あの……大丈夫、ですか？」

その沈黙を破ったのは、ゆったりとした口調の少女だった。

「ええっと……」

人と会話したのはいつぶりだろうか？と、場違いなほど陽気なことを思いながら、僕は困惑していたように顔を歪めた。喋ろうにも喉に何かがつつかえたように上手く言葉を発せれなかった。自分の喉がこれほど貧弱になつていたなんて思いもしなかった。最近、親ともろくに会話してないのが仇となつたらしい。

「大丈夫なのか？ 大丈夫じゃないのか？」

今度は狼少年が話しかけてきた。先ほどまでの警戒していたはずだったが、ズイツと顔を突き出して聞いてくる。

「ち、近いって……」

漸く言葉になつた声は小鳥の囀りのように小さかった。

「え？聞えないから近づいているんだろ」

やはり耳なのか、狼のような獣耳を傾けてくる。

「分かった、分かったから離れてくれ！」

やっと聞えたのか、顔を引いてくれた。ホッと一息つき、僕は先ほどから感じている違和感に眉を寄せた。全身がびしょ濡れ状態だった。

「何でこんなに……」

手を上げると、裾からポタポタと水滴が垂れた。それを振るって辺りに撒き散らす。

「河に落ちたから仕方ないわ」

おっとりとした声が耳に届き、俺は少女を見た。

「河に、落ちた？」

「うん。覚えてない？」

「……うん」

座っていた少女がスクツと立ち上がった。先ほどまでは十二歳ぐらいかと思っただけ、こうして立ち上がられると十四歳ぐらいには見えた。

「いきなり空からあなたが降ってきたのよ」

「僕が……空から？」

信じられない言葉に、僕は開いた口が塞がらない気分を味わった。少女に言われたことが事実だったとしても、全く身に覚えがない。

「そうよ。そして、その河に落ちてしまったの」

彼女が指し示す方向を見ると、確かに河が存在していた。立ち上がって河に近づいてみると、底は緩やかな河川だった。しかし、河の先にある大陸がうつすらとしか視認出来ないくらいには広い。

「……嘘だ……だって空から降ってきて無傷って……」

顔の半分に手を当て、噛みごと握った。どこも痛いところなんてない。空から河に叩きつけられたら無傷でいられるはずないじゃないか。そう思うと、頭がガンガンと痛み出す。

「っ……」

「どこか痛いのか？治そうか？」

「は？ どうやって……」

コートに隠れていた手が出てきた。その手にはどこから出したのか分からないくらい長い杖が握られている。

「私はエルフ族のリラよ。治療や魔法は任せて？」

「ま、魔法？」

現実では有り得ない単語を聞いて素っ頓狂な声が出た。訝しげな目をリラと名乗った少女に向ける。

「魔法よ。知らないの？」

「あのファンタジー小説とかゲームとかで有名なあの？ てか、そもそも現実に……」

肩を竦めて言い募る自分の言葉を止めた。そして三人の姿と周りの景色を見比べる。

「そう言えばさ、ここってどこ？」

「ここ？ ここはここだよ」

「いや、そうじゃなくって……夢？ これは僕の夢なのか？」

「夢？ 夢だったら俺たちは出てこないだろ」

「そもそもお前は誰だ？」

初めて聞いた猫少年の声に下げていた顔を上げる。そして三人尾顔をじっくりと見るが、やはり現実的にいるはずのない人物ばかり。コスプレかと一瞬疑ったが、狼少年の耳は本物のように動いていた。自分の頬を軽く抓ってみたが、痛みがあるだけで夢から覚めない。

「夢じゃ……ない？」

サツと顔から血の気が引いていく気がした。夢でもコスプレでもなければ、これは現実だ。全身で感じる自然は現実そのもの。頬を撫でる風も、足から伝わる地面の感触……何より三人のからにも触れられる。

「現実……」

ポツリと呟いた言葉に、眉間の皺を更に深くなるのを感じた。一人で困惑している僕に飽きてきたのか、三人は好き勝手に喋っている。ふと、狼少年と目が合った。

「んで？ 結局お前は誰なんだ？」

「僕は……僕だよ。僕は西園寺龍也。君たちは？ えっと……リラ、だっけ？」

「そうよ。一回で覚えてくれたのね」

ニッコリと微笑まれ、自然と顔が緩む。こんなに自然に笑えたのはいつ以来だろうか。

「うん。リラ以外の二人は？」

「俺は人狼族のネオ！ よろしくな、リュウヤ」

「俺は猫人族のキラだ」

「ネオとキラ、だね。それで……この世界の名前ってある？」

「あつたりまえだろ？ この世界は“ The world of game ”だ！」

「ぎ、わーると……何？ すっごい名前……」

「私たちはワールドゲームって呼んでるけどね」

「ワールドゲーム……」

「ま、世界の名前なんて早々呼ばないから気にしないしな。それよりさ！ これから何して遊ぶんだ？」

また考え込みそうになった僕はネオに聞き返してしまった。

「そうだな、広い草原にいるわけだから走るか？」

「ちよつと……」

「お、かけっこか！」

「ちよつ、待っ……」

「わあ！ 楽しそう」

「何で……」

「よし！ 決まり！！」

会話に入れず、僕の言葉は虚しく宙に舞うだけだった。肩を竦めて立っていると、ネオがクルツと顔を向けてきた。

「ほら、リュウヤ！ お前も一緒にかけっこだ！」

「いや、だから……」

断ろうとした言葉が喉につつかえた。ネオはそんな僕に手を差し伸べてきたのだ。その手を取ろうと自ら手を伸ばしてみるが、その

手を握る途中で戸惑った。無条件に差し出された手を握ってもいいのだろうか？僕と遊んで楽しいのだろうか？

溢れる疑問は、胸に引っ掛かっていた疑問。人との関わりに躊躇してしまっ一番の原因だった。

「ほら行こうぜ？」

しかし、戸惑った一步を、ネオは意図も簡単に踏み出してきた。パシッと握ってきたネオに、ビックリして目を見張った。

「ううわっ！」

聞き返す暇なく、手を引っ張られて情けない声が出た。意外と力が強く、僕は引き摺られるように走って行く。三人はそれぞれに笑い、楽しそうに風を切る。僕も三人につられて笑いが漏れた。

久々の笑顔、久々の興奮。僕らは笑いながら、広大な草原を走り抜けた。

## 第一章（後書き）

## 第二章

草原を果てしなく歩いてみると、僕らは交易が盛んな街に着いた。彼らから聞くと、この街は世界の交流地点だという。つまり全国の食物や服飾、はたまた多くの種族が集まる街らしい。その街の名前は交易の街カバト。

「広……」

入ってすぐの僕の感想がその一言だった。街というより国と言ったほうが正しい気分だ。啞然とする僕を三人はニヤニヤと笑っている。

「何？」

「驚いてるな、て思ってたさ」

「こんなに大きな町見たことないから。てか、ここって街なわけ？ 国……にしては小さいのかな……」

「ここは元々小さな交易の町だったの。そこにたくさん種族が交流するようになって……今はこんなに大きくなったのよ」

「ふうん」

「様々な種族の商人が集まって、たくあんの種族が集まって……カバドはそんな街なの」

「しかも！ カバドは向こう側にもあるんだぜ！」

ネオの台詞に、僕は聞き返す。

「どういう意味？」

「河を挟んだ向こう側の街もカバドの一部ってことだ」

質問を返してくれたのは普段口数の少ないキラだった。その事と、カバドのこと両方に驚いた。

「日本で言う県並みの広さだな……」

「おー！ 兄ちゃん、珍しい服着てんなあ！」

「肩から下げているのは何だい？ 良かったら売っておくれよ」

喋っていた途中ですれ違った商人らしき動物に話しかけられた。どう反応していいかわからず、僕は困惑しながらも苦笑で返した。「ごめん、おっちゃん！ おばちゃん！ こいつの大切なもんなんだ！ 売れないってさ」

「そうか！ そいつぁ残念だ！」

「大切なもんじゃあ仕方ないね。じゃ今度は店の物を買っておくれよ」

「また後で！ 観光中なんだ、俺たち！」

大声のやり取りを聞きながら、僕はネオを不思議そうに見ていた。笑顔で喋ると彼と商人たちを交互に見比べる。どちらも楽しそうな表情だった。知人なのかと思ったが、名前を呼ばないところを見ると他人同士らしい。

一通りの会話が終わったのか、ネオは元気に手を振って別れの言葉を口にする。キラモリラも小さく手を振った。僕も慌てて手を振る。

「んじゃ、先に行こうぜ」

そう言うだけでネオは止めていた歩を進めた。その後姿をまじまじと見つめる。明るく元氣に対応出来るのは幼さ故だろうか。

大差ない歳の差と思っていた自分が一気に歳を食った気分だ。

上機嫌で進むネオに、僕は堪らずに口を開く。

「あのとき…… フォローしてくれたの？」

しかし、予想していたのとは違う反応が返ってきた。三人は驚いたように僕を覗き込んでくる。

「え？ 何？ いったい……もしかして、変なこと聞いた？」

更に喋った僕に、三人は驚いていた表情をフツと変えた。三人とも何が嬉しいのか、ニツと笑っている。

「いや、やつとお前から話しかけてきたな、て思ったただけだよ。それに、あの人たちも元氣付けようとして話しかけてきたんだぜ、きつと」

「え？」

「子供に商売の話はしてこないものね」

「ああ。物珍しかったのは本当だろうけど」

笑い合っている三人が分ならず、僕は怪訝な顔を向ける。

「そんな難しい顔ばつかすんなって！」

「うわっ！」

ネオにバシツと肩を叩かれた。本人はちよつとのもりなのか、笑っている。彼の力が強いだけなのか、それとも僕の体が弱すぎるのか。どちらにしても叩かれた肩はヒリヒリと痛かった。

「次行こうぜ、俺たちも、まだ全部見たことねーんだ」

「う、うん」

もう一度叩かれないうちにネオと少し距離を取る。首を傾げる彼に、僕は苦笑で誤魔化した。

けれど、実はもうヘトヘト。これ以上関わるのは遠慮したい。楽しいし、何よりこれほど長い間に一緒にいたことは本当に何年かぶりだった。だから、少しだけ名残惜しい。でも、少しだけなんだ。

「ごめん、僕……」

俯いてなるべく三人と目を合わせないようにする。

喉が痛い。声が震え、泣き声のように聞えるかもいけない。それでも、僕には無理なんだ。人に執着することも、自分でも整理出来ない感情に襲われるのも怖い。

「助けてありがと！一緒に遊べて楽しかった！でも……さよなら！」

今まで聞いたことのない大きな声に、三人とも驚いた顔をしていた。啞然と僕を見ている隙に、僕は逃げるように走り出す。

「え！？ちよっ……リユウヤ！」

声をかけてくれるネオを振り切り、僕は三人から全力で走り去った。

### 第三章

全力で街の中を走り、三人の姿が見えない所まで来ると、僕は漸く立ち止まった。いつもなら走って数分で息が上がり、立っていられないほど全身から力が抜ける。けれど、今は息を乱しただけで倒れることはなかった。

「ハア……ハツ……」

両膝に手を置き、息を整える。ふと眉間に中指を当てた。

「？」

そこにあるはずの金属の感触がなかった。癖になってしまった眼鏡の上げ方。愛用の眼鏡がないことに今気付いた。

いつからなかった？

さつき走ったときか？

でも、それなら視界が悪くなって……そもそも起きたとき、ちゃんとあっただろうか？

ぐるぐると頭が回る。肩に乗ってたヘッドフォンは、ちゃんとある。しかし、眼鏡の存在は覚えがない。もしかしたら、空から降ってきた、というときになくなったのかもしれない。

「あ、れ？」

眼鏡の状態で、辺りを見回した。やっぱりよく見える。裸眼のときは少し前の文字すら歪んで見えなかったというのに。今では視力が戻ったように、遠くまで見えるのだ。

目の周りに手を当てるが、やはり眼鏡はない。肩のヘッドフォンを手にやり、耳にかける。スイッチを押すと、ちゃんと音楽が流れた。どんなアーティストにも興味が沸かず、結局パソコンから落としたのはゲームのBGM。ちゃんと、あのとき止めていたところからかかった。それにホッと息を吐き出す。そのまま局を聞きながら、

僕は方角を気にせずに歩き始めた。

龍也が去った後、三人は呆然としていた。

「俺……何か悪いことしたか？」

両耳をシュンと下げ、ネオは頂垂れた。リラも困った表情をしている。

「リュウヤは……俺たちと遊びたくなかったのか？」

「ネオ……」

じわりと目が潤む。しかし涙を流す寸前で我慢した。

「泣かないで、ネオ。きつと、きつとリュウヤは素直じゃないのよ。キラだって、最初はそうだったでしょう？」

「余計なお世話だ。まあ、目を合わせなかったってことは、少しは悲しんでいたんじゃないか？」

「え？」

下を向いていた顔を、キラに向けた。潤んでいた目に、サツと光が宿る。

「嫌だったりすれば、もつと他人には冷たい。それこそ顔を背けずにすっぱり言い切ったはずだ。だが、アイツは顔を背けて言っていた。多少未練があったと考える方が妥当じゃないか？」

「そつか……そうだよな！　なら、リュウヤを追いかけようぜ！  
んで、今度こそ一緒に遊ぶんだ！」

いつもの元気が戻り、三人は笑い合った。そして、龍也が走り  
去った方向、北東へと向かう。

「なあ、さっき変な格好の男の子見なかった？」

「男の子？　もしかして俯いて歩いていたあの子かな？　耳丸かつ  
たし」

「その子、どこに行ったか知りませんか？」

「街の外側に行こうとしてたみたいだぞ？　ほら向こう側の出入り  
口に向かって行ったし」

店を開いている商人が指した方角は更に北東だった。三人は心配  
そうに顔を見合わせる。

「更に北東は……」

「ああ」

「リュウヤ……リュウヤ！」

「待ってネオ！」

「行くぞ、リラ！」

「うん！」

走り出したネオの後を、二人は慌てて追った。三人は息を切らし  
ながら街を北東に進んでいく。龍也の足が速いのか、街の出入り口  
に着いても彼には追いつけなかった。

## 第四章

三人と別れた後、僕は果てしなく広い街を歩いていた。時々道を尋ねては進み、自分が歩いている方角すら分からない。けれど、漸く見つけた出入り口。そこから一步先は見回しても、砂だらけの地面だった。

「砂漠？」

くらくらすする頭でも、砂一面の地面を見て砂漠だという判断は出来た。しかし、それ以上考えられない。頭痛が酷く、頭を動かすことが億劫だった。頭痛とは別に、危険の警報音が頭に響く。

うるさい。

奥歯をギリツと噛み締める。嫌な思い出が次々と浮かんでは消えていく。それが、どうしようもなく歯痒くて痛い。じんわりと目の縁に涙が溜まるのが分かるが、涙は落ちなかった。思いを振り切るように、砂漠へと足を踏み出す。

クツシヨンのような感触が足の裏から伝わる。街や草原とは、また違う感触。

「……うるさい……」

ヘッドフォンのボリュームを上げる。耳が痛いほど曲を流しているのに、頭痛は痛みを増すばかりだった。最大まであげているのに警報音と頭痛は止まない。

「……ネオ……リラ……キラ……」

耳に届かないけれど、口が動いたことが分かった。無意識に呼んだ名前は、自分から離れてしまった三人。一人一人の顔が頭に浮かび、笑顔を向けてくれている。

「なんで……」

答えを求めている疑問が口を突く。返してくれる声は、もうい

ないのに。

「……」

それでも口は動く。けれど、今度は音量にかき消されて解らなかった。

三人のことが頭を過ぎってから少し時間が経ち、頭痛が治まっていたことに気付いた。ヘッドフォンの音量を下げ、曲を切る。耳からそれを取ると、風が耳に届いた。辺りを見回せば、入り口までは覚えていた光景が思い浮かんだ。しかし、砂漠に入ってから記憶がおかしい。上手く思い出せなかった。

「……てか、それより……ここどこだよ……」

周囲を見回しても、頼れる人影は一つもない。砂漠に必要なはずの水や駱駝の準備もしていない。それが最悪の状況ということは、嫌でも理解できた。来た道を引き返そうと振り向くが、先ほどの風のせいか、足跡が消えている。

「はあ……」

しかし、意外と冷静だった。ため息が出ただけで、変にパニックではない。それは救いだと思っていいいのか。

とにかく、この状況を打破しなければ大変なことになる。

「ん？」

ノイズのような音が聞えた気がして振り返った。しかし、何もいない。気のせいかと思った矢先、前方に黒い玉のようなものが浮かんでいた。その玉が幾つもの地面から沸き上がり、それらが一つに集まっていく。

「はあ!？」

軽く自分の背丈を越えたその形は巨大な蠼螂へと変わった。

「ううわぁっ!」

片方の大きな鎌を振り下ろしてきた。僕は慌てて後ろに向かっては走った。足元ぎりぎりの所に鎌が刺さる。

「……っ……何だよ、この音……」

キーンという音が耳に響く。耳を塞いでも、その音は脳内で反響

した。

「うつ……」

腹の底から叫びたい。

しかし、喉に蓋をしたように、声はくぐもった音にしかならなかった。再び鎌で狙ってくる物体を睨みつける。力はないし、武器もない。逃げても、すぐさま疲れて逃げられなくなる。

「だったら……」

死ぬことなんて怖くない。

両手をバツと左右に広げた。その僕に向かって振り下ろされる鎌から目を逸らしてギョツと瞑った。

「リュウヤアアアアア——ッ！！！」

「え？」

ビククリして目を開いた。鎌はすぐ目の前に近づいてきている。けれど、僕の隣から影が素早い動きで螳螂に向かっていった。その後姿は見覚えがある。

「ネオ！？」

僕に優しくしてくれた三人のうちの一人、ネオだった。

「うおおおお——！」

唸るような言葉と共に、彼は螳螂に飛び込んでいく。

「ネオ！」

口を大きく開き、彼を呼んだ。彼は振り返ることなく、螳螂を貫いた。

「浄化の産声！」

凜とした声が聞こえ、再び視線を後ろに向けた。杖を掲げたリラと、その隣にキラがいる。

リラの掲げた杖から、優しい音色が流れた。歌のないメロディー。鈴でも鳴っているような響きを持っている。その音色が鳴り終わるころ、先程の黒い螳螂は消え、頭に反響していた音も消えていた。

「皆……」

あんな別れ方をしたせいもあり、喜びと罪悪感が同時に胸を締め付ける。近づいてくる三人に顔を合わせれず、思わず俯いてしまった。

「リュウヤ」

名前を呼ばれ、ピクリと手が動いた。でも、顔は俯いたままだ。

「……何で……」

小さな声が口を突いた。三人は僕の言葉を待っているのか、何も喋らない。

「何で追って来たの？」

自分が悪いのに、こんな風にしか聞き返せない自分が嫌だった。どうして謝れないのか。どうして感謝出来ないのか。そう思うのに、いつも不器用にしか接することしか出来ない。

「俺たち、友達だろ？」

「っ！」

それなのに、ネオは事も無げにそう言ってくれた。泣きそうになった顔で三人を見つめる。

「泣かないで、リュウヤ。私たちと友達なのは、嫌？」

悲しそうな顔をして問うてくるリラ。

「いい加減、素直になれ。お前は一人じゃないだろ」

励ましてくれるキラ。三人の言葉が嬉しくて、涙が溢れてきた。器に入った水が溢れるように、目に溜め切れなくなった涙が一粒ずつ流れていく。

「リュウヤ、どこか痛いのか？治そうか？」

情けなく泣き崩れた僕を心配そうな表情をしてくれる。それでも僕は声を抑えて泣いた。数年ぶりの涙は、やはり塩辛かった。

## 第五章

泣き終えた僕は、何故か眠ってしまったらしい。起きたときには天井が見え、顔を横に倒せば三人の姿があった。皆、それぞれに寝息を立てている。彼らを起こさないように、ソツと体を起こした。ズキズキと頭が痛むが、妙にさっぱりしている。

「ここは……」

「宿屋だ」

誰にも聞えないように小さく呟いたつもりだったが、キラには聞えたいらしい。椅子に座ったまま顔を向けてくる。

「起こした？」

「別に……気分はどうだ？」

「うん。すつきりした……」

それ以上の言葉が続かず、僕は顔を背けた。そのままの状態で口を開く。

「聞いてもいいいか？」

「……何だ？」

「どうして……どうして追ってきたんだ？ あんなこつと言って別れた僕に……」

「ネオが言ってたろ。それだけじゃ、不満か？」

「……不満っていうか……」

「納得出来ない？」

「……うん」

今度は素直に頷いた。キラを見ていないから、彼がどんな表情をしているのか分からない。けれど、言葉は淡々としていて、リラやネオとは違った安心感があった。

「一緒なんだよ」

「一緒？」

キラの言葉にピクツと反応して、顔を上げた。そうして彼へと目

を向けると、彼は苦笑したような、何ともいえない顔をしていた。

「俺もネオもリラも、皆同じなんだよ。過去に黒いものを持つてる」  
「黒い、もの？」

怪訝そうな顔を向けると、キラは驚いたように目を見開いた。

「お前もそうじゃないのか？」

「え？」

「あのバグが見えていたんだろ？」

「ばぐ？ バグって、ゲームとか起きるバグのことか？」

「さっきの怪物のことだ」

「ああ……さっきの蟻螂のような黒いやつか。バグって言うんだ？」

「見えていたんだな？」

「うん、見えてたよ」

ホッと思を吐くキラ。何がどういう風に繋がっているのか分からず、今度は僕が怪訝な顔をした。

「バグは、過去に何かしら柵を持つてる奴にしか見えないんだよ」

「柵？」

「それは後悔であり、自分の中で一番思い出したくもない過去。乗り越えられない過去に囚われたものにしかアイツらは見えない。だから、アイツらが見えたお前は、俺たち動揺の存在なんだ」

「過去、か……」

バグと呼ばれたあれに遭遇する前に思い出していた記憶の断片が脳裏を過ぎった。そう、それは消してしまいたい過去。忘れたくとも忘れられない。

「確かに……僕にも忘れたい過去がある。自分の存在を消したいと思えるほどの……でも、不思議だな。キラならまだしも、ネオやリラにも、そんな過去があるだなんて」

二人の穏やかな寝顔を見ながら、僕は見掛けで判断したことを悔いた。

「誰にも、そんな過去の一つや二つは持っているさ。あと、俺ならって何だよ」

「う、ごめん」

「ま、否定しねーけどな。ネオやリラは、そんな過去を持ってそうには見えないし。実際俺もコイツらには酷かった」

「……」

「だから、お前の気持ちだつて分からなくない」

「そこまで言うつと、キラは口を閉じた。声をかけようとしたとき、ネオとリラが目覚ましてしまった。」

「ん〜！ おはよ、リラ、キラ、リュウヤ」

見た目通り健康体のようで、すっきりとした表情のネオ。リラは未だに夢を行き来しているように半分目を閉じている。

「はよ、ネオ。ほら、リラも起きろつて」

「ほへ？」

キラに言われ、リラは起きようと必死だ。しかし、開いた目はゆっくりと閉じていく。

「お、はよ……」

たどたどしい口調になってしまったが、ネオたちはニッコリと笑顔を向けてくれる。そのことに、ホッと胸を撫で下ろした。

「おふあよ、ふああ……」

いまだに半分寝ているらしく、リラは挨拶は間の抜けた言い方だ。そのことにプツと噴出すと、我慢出来ずに声を抑えて笑い出してしまった。笑い声にビックリしたのか、三人は目を見開いて僕を見てくる。しかし、三人にも笑いが感染したのか、三人とも笑い出した。笑ったおかげで目が覚めたらしく、リラの目もしっかり開いている。僕らは順番に顔を洗うと、宿屋の一階へと下りて行つた。一回のホールは食事をしている他の客たちで賑わっていた。キラが四人分の席を見つけ、そこに座った。メニューの一覧表を広げると、名前がずらりと並んでいる。しかし、どの名前がどんな料理かは分からない。三人は既に決まっているらしく、厨房に向かって大声で注文を言つた。どうやら、この宿屋では注文を取りにくるウェイターのような存在はいないらしい。

「リュウヤは何を食べるの？」

「うーんと……何の料理か分からないんだけど……」

一覧表を指しながら、僕はリラに言った。彼女は不思議そうな顔を向けてくる。

「分からないって……じゃあ、リュウヤはいつも何を食べてるの？」

「……ずっと引き籠ってたから、ころくに食べなかったな。あまり食べようとは思わなかったし」

「ダメだよ、リュウヤ。食事は生き物にとってしなければならいことなんだから。ちゃんと食べようよ」

「うーん……」

「分からないなら私が選んでもいいかな？ 食べられない物ってる？」

「特には……」

「それじゃあねー……うん、これがいいかな。パンバコのセットー追加お願いします！」

すぐさま決めたリラは、厨房に向かって叫んだ。そして後は料理を待つだけなのか、三人は呑気に雑談を始めた。最も、その内容は食べた後の遊びについて、だったけど。

「来た来た♪」

「え？」

はしゃぎ出したネオに、僕は首を傾げた。振り向くと料理を乗せた皿が何枚も飛んでくる。もちろん、運んでくる人の影はない。

「なっ……」

「この名物なの。物体浮遊の魔法、フライを使ったパフォーマン。しかも、ちゃんと注文したテーブルに運んでくるの」

「へー。そんなことにも使うんだ？」

「うん。というか、普通は日常を助けるための技なの」

「え？」

リラの台詞に、驚いて目を見開いた。しかし、彼女は何も答えず、静かに置かれたスープを口に含んだ。それ以上聞き返すことも出来

ず、僕はリラが頼んでくれたパンバコのセットに目を向けた。香ばしく矢変えたパンのような物に果実が挟まれている。それは、フルーツサンドを思い出してしまいそうな食べ物だった。そして、もう一つ。ヨーグルトのような真つ白なデザートがついていた。

「サンドイッチみたいだな、これ……」

パンバコを呼ばれていたフルーツサンドを持ち上げる。指先がじんわりと温もるが、熱すぎるほどではない。それをパクツとおもいきって食べてみた。

「……美味しい……」

フルーツミックスは互いの味を主張しすぎて、果実その物の味を台無しにしまっている。けれど、このパンバコは違った。苦味のある果実は甘味のある果実がフォローし、それでいて甘過ぎないほろ苦さを残す味わいだった。

「凄い……普通、果物と果物は味を台無しにして酸っぱいだけのものになるのに」

「それは甘い物と甘い物を合わせてしまうからよ。このパンバコは苦味を甘味を1:3の割合で創られているから、口の中にはほろ苦い味になるの。それと、こっちのポルンは何の味もついてないから一緒にいつてきたドレッシングで味付けをするの。ポルンは消化を促進してくれるから、胃が弱かったり、朝食でお腹を痛める人には、このポルンがお勧めよ」

リラがスラスラと解説してくれたおかげで、食べ方が分かった。リラにお礼を言うと、皆の食事を見回してみる。リラはあ苺や木の実をベースとしたスープらしい。ネオは朝から豪快に、肉の丸々焼きみたいだ。キラも肉のようだが、きちんと一口サイズに切られ、野菜も食べている。彼らの食事から目を離すと、僕はパンバコの残りを食べ、ポルンへと味を加えた。ドレッシングはどれも果物のような味で、ブルーベリーのような味のドレッシングをかけて食べてみた。まさにヨーグルトのようで、これまた美味しい。けれど、何もかけずに食べてみれば凄く不味く、もう少して吐き出すところだ

った。そんな僕を見て、三人は突っ込みながら笑ってくる。僕も舌を少し突き出して笑った。

## 第六章

三人に連れられ、僕は彼らの隠れ家に来ていた。彼らの隠れ家は、カバドの最南端の河の側にあった。三人が暮らすには少し大きめなように思えるが、中は快適だ。

一階建ての木造建築。玄関からすぐさまホールが見え、そこには小さなテーブルと三つの椅子がある。そして、机から北東の方角にキッチンがあった。奥に入れば四つのドアがあり、右がネオ、右寄りの真ん中がリラ、左寄りの真ん中はキラが使っているらしい。

「ここは？」

残った一部屋を指しながら、僕は三人に効いた。

「そこは客間としてあるんだが……」

「？」

口を閉じたキラに目を向ける。すると三人がニヤニヤと笑っていた。

「今日から、そこがリュウヤの部屋だぜ」

「いいの？」

ビククリして聞き返す僕に、三人は頷いた。胸の中で鼓動が早鐘のように速いリズムで刻んでいく。それを抑えるように、僕はゆっくりとドアを開けた。

「うわぁ……」

部屋の中は質素だったが、思わず感嘆の声が漏れた。端に置かれたベッドに、対になるような位置に机が置かれてある。机の隣には小さなゴミ箱があり、さながら人間の部屋みたいだ。これでテレビとゲーム、パソコンがあったら、言うことがない。そこまで求めれるとは思っていないけど。

「凄い……」

それでも、自室よりは綺麗だ。まるで自室と対照的な部屋。

「気に入った？」

部屋に入ってから何の反応もなかったからか、リラが顔を覗かせてきた。ネオ、キラもその後ろにいる。

「うん。でも、本当にいいの？」

「いいって。だって、リュウヤは友達なんだから」

『友達』という単語に慣れてしまったのか、僕は照れながらも笑い返すことが出来た。

「……ありがとう」

不意に口をつついて出た台詞。驚いて自分の口に手を当てた。小さいながらも、やっと口から出た感謝の言葉。胸の奥が、ポツと温かくなっていく気がする。僕は段々嬉しくなり、三人に向かって頭を下げた。

「ありがとう、ネオ、リラ、キラ」

三人はキョトンとした顔をしていたが、そのうち照れくさそうに笑った。『ありがとう』という感謝の言葉を胸に噛みしめ、僕は三人を腕一杯に抱きしめる。

「リュ、リュウヤ？」

これには三人とも慌てふためいたように驚いた。自分でも何をしているのか。頭の隅で己に突っ込んでいるが、腕の力を緩めなかった。

「本当にありがとう……」

三人のぬくもりを感じながら、僕はふと向こう側の世界を思い出した。両親の腕に抱かれていた幼い僕。友達と一緒に笑い合っていた僕。決して辛い記憶だけではなかった僕の思い出。バグのときには感じなかった温もりのある記憶が次々と溢れた。

僕は決して孤独だけの人生じゃなかったんだ。

## 第七章

三人の温もりを名残惜しそうに手離し、僕は俯いた。自分のしていたことに、今更恥ずかしさが込み上げてきたのだ。何も言えず黙り込んでしまった僕に、三人は何も言ってこない。

「部屋、そんなに気に入ったの？」

てつきり嫌われると考えていた僕は、リラの言葉に顔を上げた。

三人の表情は照れてこそいるが、怒ったような、不快そうな表情はしていない。

「あの部屋……僕の部屋にそっくりなんだ。と言っても、散らかり放題だから、違うんだけど。でも、懐かしくなって」

「故郷が恋しくなった？」

「ちよつとだけ。でも、もし帰れるとしても、まだ帰りたくない」

「え？」

ベッドに座ると、三人も隣に座ってきた。僕は一呼吸の間をおいて喋り出す。

「まだ、君たちと一緒に居たいんだ」

それは願いなのかもしいいれない。願望だと言えない。ここに居れば嫌な思いをしなくてすむ。担任の声も、親の声も。僕を傷つけようとする人たちの声も聞かなくてすむんだ。けれど、それ以上に、まだここに残りたい。この温かい三人と、もつと一緒に居たいんだ。

「だから……居てもいい……かな？」

唾を飲み込み、三人をチラリと見る。

「ここはリュウヤの部屋で、もう家族なんだぜ？ 居たいなら、居たいだけ居ればいいじゃん」

ネオの声が、一つ一つの単語が体に浸透していく。溢れだしそうな何かが胸を揺すり、また三人にお礼を言いたくなった。けれど口は言葉を紡げず、僕はキュツと唇を噛む。

『友達』の次は『家族』、か……。

一生馴染めそうになかった単語が、今では現実に溢れている。無縁だと思っていた存在が僕の前にいる。その事が、こんなにも冷えきった僕の心を溶かしていく。無理にこじ開けようとするんじゃないで、優しく包み込むような感じ。まるで『北風と太陽』みたいだ。  
「よろしく、ネオ、リラ、キラ」

「ああ、よろしくな。リュウヤ」

差し出された手を、今度は迷わず握り返すことが出来た。

日が暮れて、今日でどれぐらいの時間が経ったのか。それを思うと何だか目が冴えてしまった。実際、このワールドゲームに来てから、およそ二日目。日が暮れた回数を一日と想定しているから、今は二日目の晩ということになる。この世界での時間の経過が地球のやり方と一緒にするのは分からない。

「向こうは……」

数人の顔が浮んだ僕は、首を振って忘れようとした。しかし、気になる。

突然消えたら、皆心配するだろうか？

それとも、変わらない日常を送り続けているのだろうか？

後者の疑問の方がいい。あの画面にも、そう出ていたじゃないか。

“現世を捨てる気はあるか？”

そう、僕は現世を捨てたんだ。そして、ここに居る。このままネオやリラ、キラと一緒に暮らしていけるんだ。現世に戻るより魅力的じゃないか。

僕はしっかりと毛布を体に巻きつけると、半ばやけくそに目を閉じた。

その後、不思議な夢を見たのだが、朝になるとその内容を忘れてしまっていた。

## 第八章

夜更かしをしたにも関わらず、僕は早朝に目が覚めた。窓から外に目をやると朝日がゆつくりと天へと昇っていく。ベッドから体を引き剥がし、洗面所を探した。

まだ夜明けというのに、室内は日の光によく照らされている。日当たり良い場所らしい。おかげで電気を付けずに洗面所を発見出来た。水を出し、手で掬ったそれを顔につける。冷たい水のおかげで頭がすっきりした。ぬらした顔をタオルで拭き、鏡から自分の顔を覗く。真つ黒な髪と、茶色が濃い瞳。これといった特徴があるわけでもない平凡は作りをしている自分の顔を見つめた。その頬を両手で叩く。

「よし……」

すっきりと開いた目を見て、僕は小さく呟いた。

キッチンへと移り、冷蔵庫を開いた。しかし、その中身は空っぽと言っているほど何もなかった。僕は肩を竦めると、冷蔵庫の扉を閉めた。

「何もないだろ」

声をかけられ、僕は後ろを振り返った。そこには壁にもたれかけたキラが居る。ファツと欠伸をした口から、小さな牙が垣間見えた。

「おはよ、キラ」

「はよ」

「早起きだね」

「お前ほどじゃないさ。それに、普段はもつと寝ている」

「もしかして起こしちゃった、とか？」

「いや。今日は目が冴えただけだ」

キラの台詞に、僕は胸を撫で下ろした。せつかく早起きしたのだから、三人に朝食ぐらい作ろうと思っていたのだ。

「ねえ、何で何もないの？」

「外食ばかりだったからな。料理する奴が誰もいないから、何も置いてないんだ」

「そうなんだ……」

「何か作るのか？」

「ちよつとね。でも、思えばこの世界の料理と僕の世界の料理は全く別物だから、何も作れないか」

宿屋の食堂でリラに選んでもらったことを思い出し、僕は苦笑した。眠たそうな目を僕に向けながら、キラは体を壁から離れた。

「買い出しに行くなら付き合っぜ」

「ありがと。でも、いいよ。僕の知る材料があるとは思えないし」

「ついでに料理のレシピを買えばいい」

「……何か作って欲しいの？」

あまりにも食い下がってくるキラに、僕は眉間に皺を寄せながら聞いてみた。キラはハツと我に返ったような表情をすると、顔を背けてしまった。どうやら図星だったらしい。その意外な一面を見た僕はプツと、小さく噴出した。抑えようとしたが、次には腹を抱えて笑い出してしまった。

「ご、ごめん。でも……うん……作れるか分からないけど、やってみるよ。買い物、付き合ってくれる？」

笑われたことを気にしているのか、キラはムツとした顔で睨んでいた。しかし、僕の誘いを聞くや否や、耳をピンツと立てらせ、尻尾を揺らした。

「ああ、付き合っぜ」

言葉は普段と同じクールなのに、耳と尻尾の反応に、僕は再び笑い出しそうになるのを必死に抑え込んだ。

いまだ眠っているであろう二人に書置きを残し、僕とキラは朝の市場へと出かけて行った。

## 第九章

朝の市場はとても賑やかだった。取れた手の魚類や野菜、はたまた肉類の売上げに大忙しだ。客の足も半端なかった。昼日中なんて目ではない。まるで毎日が祭りのように賑わっている。

「レシピは別の区間から買ったから、次は材料だな。この通りは新鮮は魚類や肉類、野菜を扱っている区間だ」

「へえ。でも、魚類ってどう取るのさ？　ここは大陸の中心にあるんじゃないか？」

「そうだ。この河は北にある人狼族が支配している山から流れている。だが、この河は底が深くてな。船が何隻入っても余裕があるんだ」

「でも、ここの河が水源だろ？　船が出入りしてもいいのか？」

「いいや。水源は人狼族の山とエルフ族の湖だけだ。ここの河は海水だから、飲み水には出来ない」

僕は河がある方角へと目を向けた。近くで見たあの河。海ではないかと思うほど広い大河。確かにあそこなら船が何隻でも入りそうだ。けれど、まさか本当に海の河だとは思わなかった。

「そう言えばさ、あの河って名前あるの？」

「あるぜ。あの河の名は、アクアライン」

「アクア、ライン……」

「そう。この河が広いおかげで、この街の漁業は成り立っている。そうでなきゃ、こんなに新鮮な魚は手に入らない」

「なら、川沿いで釣りをすれば釣れるかも」

「どうだかな。河って言っても、かなり深い。それに利口な奴らばかりだから、そんじょそらの餌じゃ食いつかないぜ」

「キラ、詳しいね。もしかしてやったことあるの？」

「ああ。三人ともやって結果は惨敗。食糧確保出来なかった」

あっさりと負けを認め、耳を下げた。会話しながあっても、僕は

店を周り、どの食材を買うか考えていた。口を動かしながらも手を動かす。たまにそれが出来ないと聞くが、こんな簡単なことが出来ないなんて分からない。

「これ、は……」

ふと目に止まった異様な魚。どつぷりと太った丸形で、目が異常なほど大きい。どう調理して不味そうだ。

「へえー、珍しいのも上がったらしいな」

「え？ 珍しいのか？ これ……」

キラが肩越しから感嘆の声を上げるので、僕は目を丸くした。どこからどう見ても不味そうにしか見えない。それに鯛のように赤色だが、どちらかというと紅色のようで、見るだけで気持ち悪くなってくる。

「うえ……」

堪えきれずに声が漏れた。そんな僕を見て、キラは喉の奥で笑う。「こいつはアカシチって言って、滅多に上がらない魚だ。見た目のわりに脂が乗っていて、どの魚料理にも合う」

「へー、これが……ね」

「疑うなら食ってみろよ。おっちゃん。こいつくれよ」

「お、坊主。この魚は高えぜ？」

「いくら？」

いかにも漁師といった体格の男が指を五本立ててきた。

「五イルズ」

値段を聞いてアカシチを見るキラの目には狩猟本能が現れていた。狙った獲物は逃さない、といった風貌だ。

「高いな。これぐらいの大きさなら一イルズだろ」

「四イルズ」

「二イルズ」

「……しゃあねえ！ 三イルズにしといてやるよ！」

「サンキュ、おっちゃん」

懐から小袋取り出し、金らしきものを三枚渡す。漁師のような男

は顔をしかめながらそれを受け取った。

「ったく……坊主のわりに上手い掛け合いだな」

「ついでにこつちも買うよ。これ、三十センスでいいんだろ？」

「ああ、毎度あり！」

いきなり目の前で始まった掛け合いを啞然として見ていた僕は、開いた口が塞がらない思いだった。金額こそ分からなかったが、それでも持っていたお金を無駄なく値切っていた。それに店の人の反応を見ながら値切り、それでいて堂々とした態度での交渉。掛け合いに勝ち、ニイルズも下げてしまった。その上で、安いおまけを買うという配慮までしている。その手馴れた行動に、年齢不相応なものを感ぜずにはいられなかった。僕のいた現代っ子ではまず無理な話だ。

「凄いな、キラ」

「あの二人と一緒に居れば、これぐらい普通になる。ま、俺が財布の紐役つてところだ」

「なるほど。あの二人にさっきの真似は出来ないね」

家に残してきた二人を思い浮べて苦笑した。先ほど買った魚とアサリのような貝を入れた袋を持ち、僕らは漸く帰途へと着いた。

「それにいても……どんな料理を作ればいいんだ？」

「……そこはお前に任せる」

「任せるって……考えずに買ったのか？」

「何を作るかわわなかったろ」

「それを言う前に、掛け合いを始めたのはキラだって」

「……」

魚とキラを見比べて言うと、彼は無言で足を速めた。そんな行動をとる彼に、やはり猫みたいだ、と思ってしまう。口の両端が吊り上げるを感じながら、本屋で買ったレシピの内容を思い返していた。頭の中でページを捲り、魚料理の分野を開く。キラが呼んでいた魚の名前を探そうとしたが、さすがに材料までは覚えていなかった。

家に着くと、キラは電池が切れたように眠りだしてしまった。ど

うやら眠たいのを我慢して付いて来てくれたようだ。僕はキラを椅子に座らせ、毛布をかけた。それからレシピを捲っていく。料理なんて久しぶりだから上手く出来るとは限らない。それでも、ある程度の知識は持っている。幸い調理器具は地球での形状は近いから何とか使えそうだった。

「……これにするか」

目に留まったページに印をつけた。買ってきた魚を存分に使える物みたいだ。早速キッチンに立つと、僕はアカシチをきり始めた。

## 第十章

鼻をヒクヒクと動かしながら、ネオたちは起きてきた。湯氣に乗った匂いが三人を眠りから覚ましたようだ。健康体であるネオの目がサツと光った。

「すげー！ トリッドにミスラだ！」

料理の名前を言い当て、ネオは口から涎を垂らした。

トリッドという料理は魚の刺身のことだ。けれど単なる刺身ではなく、漬物みたいな物にその身を漬けて味を染み込ませるものだった。醤油のようなあ少し辛味のある漬物で、一口味見してみると、それが脂とよく合っていた。そして、身すらというのは魚をダシにしたスープのことだ。頭と尻尾、それと骨でダシを取り、そこに茸や肉、野菜を入れて煮込む。そして出来たスープにバコと言われる感想した物を漬けながら食べるらしい。

「どうしたんだ？ リユウヤ」

自分の席に座りながら、ネオは僕にそう言った。

「今までのお礼、て言えはいいのかな……少しでも恩返ししたくて今更照れくさくなってきた僕は明後日の方向に目を泳がせながら喋る。そんな僕を不思議そうな顔を向けくるネオは首を傾げた。

「朝早くから用意してくれたんだぜ、ネオ」

「キラは知ってたのか？」

「ああ。朝の市場について行った」

言葉の足りない僕をフロアするように、キラは言葉を紡いだ。その言葉を受け、ネオは僕からキラに視線を変える。

「いーなー！ リユウヤ、今度は俺も連れて行ってくれよなー！」

「そんな早起き出来ないだろ、ネオは」

「いーじゃんか！ 行きたいんだから」

「ま、まあまあ。それより料理が冷めないよううちに食べよう？」

「そっだな」

「ほら、リラ。ちゃんと起きないとネオに全部食べられるぞ」

「ふあゝい」

やはり眠たいのか、リラはウトウトしたまま席に着いた。しかし、匂いが鼻をくすぐると半目だった瞳が開かれていく。

「わあ、すごい！ どうしたの？ この料理」

「リュウヤが作ってくれたんだぜ！？」

「へえゝ！ 凄いね、リュウヤ」

嬉しそうな三人の顔が、堪らなく嬉しかった。でも、素直になれずに挙げていた顔を再び俯かせてしまう。

「あれ？ これ何？」

しかし、リラの声に僕は顔を上げた。三人の視線の先には大きな皿がある。

「あ、それは僕の世界で刺身って言われている料理だよ。魚の身を切って生で食べるんだ。脂のノリがいいから、多分刺身にしても良いと思つて」

「さしみ……これがリュウヤの世界の料理かあゝ」

「魚自体違うけどね」

ネオの感嘆した声に、小さく突っ込んだ。三人は早く食べたいらしく、キラキラと目を輝かせている。

「それじゃ、いただきます」

「……いただきますーす！」「」

三人の声が笠名ツリ、料理にかぶり付いた。ネオ以外は箸のような物を使ってトリッドを食べていた。僕もトリッドを一口食べてみる。魚の脂と漬けていた辛味が下に広がる。辛いとを感じるが、火を噴くような辛さではなく、ピリツとくる辛さだ。お次はバコを千切つてスープに絡める。スープが染み込み、それをパクリと食べた。口の中でスープの味が広がっていく。辛味はなく、先ほど食べたトリッドの味をほんのり包み込むような深い味わい。魚のダシと野菜がぶつかり、それらを抑えているような茸の味。小さく切った肉は柔らかく、トロツとしたスープが喉を通った。

「すっげーよ、リュウヤ！」

「うん。初めて作る料理なのに、ちゃんと美味しいよ」

「ああ。トリッドもミスラも、両方ともいい味してる」

三人から誉められ、顔が熱くなっていくなを感じた。

「ありがとう、三人とも」

「お礼を言うのは私たちの方よ、リュウヤ。こんなに美味しい料理をありがとう」

「そうだぜ、リュウヤ」

「ああ。料理を作ったのはリュウヤだ。美味しい朝食、ありがとな」  
「誉められたことが嬉しいけれど照れくさい。けれど、今度は三人に笑顔を向けることが出来た。」

「どういたしまして」

そう言つと、僕は食事を再会した。刺身と言えば醤油なのだが、あいにくそんな調味がなくても、何にも浸けず食べることが出来た。何にでも合うというキラの言葉は間違っていなかった。

## 第十一章

食事を終えた僕は、自分の椅子をテーブルの下にしまった。客陣容にあった椅子を使っていたのだが、やはり自分の椅子が欲しい。ネオたちの椅子を見てみると、そんなことを思ってしまう。ネオの椅子は真っ赤に塗られた円形の椅子だった。リラの椅子は優しいグリーンの色を、キラは空のような真っ青な色だ。それらは彼ら自身のイメージカラーのようで、それぞれ愛着があるようだった。大切に使用している様子を見て、僕もそんな椅子が欲しくなったのだ。

「客人用の椅子を塗ればいいのに」

用意してもらった木の板を切っていると、リラが話しかけてきた。キラとネオは店の買出しに行ったので、今は僕とリラが留守番中だ。どうやらまた何かを作って欲しいらしく、二人とも上機嫌で出かけて行った。最初はリラも行く予定だったらしいのだが、一緒に残ってくれた。一人は寂しいだろうから、と言って。

「客人用は客人用。僕だけの椅子が欲しくなったんだ」

三人と同じ円形の椅子を目指し、型を切っていく。円形の座席部分に、脚が三本。それを組み合わせれば椅子の出来上がり。後は好きな色を塗って乾かせば完成だ。

「自分だけの椅子、か。うん、欲しいよね？　そういうのって」

「だろ？　それに、苦労して作れば愛着も沸く」

「色を塗るだけでも、愛着は沸くわ」

「そうかもね。でも、やりたいんだ。向こうじゃ、こんな気持ちにならなかった。何かを作るのは苦手だった」

「でも、今は色々作っているわ。朝食に、その椅子も」

喋りながらも手を動かしているため、形だけなら完成しそうだった。一旦作業を止めてリラを見た。彼女は椅子に座った状態で足の上に肘を乗せている。そして、興味深そうに僕の手元を見つめていた。

「そうだな。自分でも不思議だ」

目を少し見開き、自分の両手を見つめた。ずっと手に馴染んでいたのはゲームのコントローラ。ゲームするしか動かさなくなった両手で、今は慣れない料理や椅子を作っている。

両手を作業に戻し、頭の中で思考を動かす。組み立てが終わり、色を塗る作業だけとなった。僕が自分に選んだ色、それは濃い紫色だ。刷毛に色を染み込ませて椅子に塗っていく。

「綺麗ね……」

リラが呟くようにそう言った。濃い紫色は淡い紫より味が出る。斑のないよう丁寧に塗れば、三人と変わらない椅子の完成だ。

「出来た」

「うん。本当に、リュウヤは器用だね！」

「そんなことないって。後は日の当る場所に置いて乾かすだけだ」

「そだね。乾いたらリュウヤも私たちと同じ、自分専用の椅子に座れるね」

まるで自分のことのように喜んでくれるリラに、僕もニッコリと笑う。笑顔が引きつっていたあの頃が嘘のように、自然と笑顔が出てくる。

そんな団欒とした空気に相応しくないほどの足音が響いてきた。ドアが勢いよく開かれ、ネオが飛び込んでくる。そして、持っていた荷物を僕に突き出した。

「また何か作ってくれよ、リュウヤ！」

肩で息をしながら、ネオはそう言ってきた。先ほど椅子作りが終わったというのに。けれど、不思議と苛つきはせず、ただ苦笑が漏れた。突き出された荷物を受け取り、中身を確認していく。

「まだ昼には早いよ？」

「うゝ」

「デザートならいいんじゃないか？」

突っ込んだ言葉に唸るネオの後ろからキラが出てきた。わざわざ助け舟を出すということは、キラも何か作って欲しいのだろうか。

しかし、前に見せた反応を見ないところを見ると、そういうわけもなさそうだ。リラに目を向けても、食い意地の張ったネオのように欲しい、ということでもないみたいだった。作れば食べる、そんなところだろう。

「果物ばかりだから、確かにデザート系統なら出来そうだけど……食べるのは昼食の後だよ」

「ええ……！」

「三時のおやつって言うだろ？」

「さんじ？」

「あ、ごめん。僕の世界では昼食後に時間を空けておやつを食べることがあるんだ。其の頃が一番消化し易いらしい」

「何だっていいよ！ それより腹減った」

お腹を押さえて言う彼に目を向けると、盛大な腹の虫が鳴いた。

「ネオは食いしん坊だなあ。果物食べる？」

「ダメだよ、リュウヤ。果物は主に調味料なんだから。そのままでは食べれないわ」

「え？ そうなの？」

果物を一つ取り出してネオに渡そうとしたが、リラの台詞に手が止まる。

「果物は調理すれば美味しいけれど、生で食べると味が濃いから食べられないの。だから、普通はジャムにしたり、色々と手を施すのよ」

「そうだったんだ。なら、ジャムにしておこう。そしたら好きなきに食べれるし。バコもまだ残ってるしな」

「そうね。それでいいよね、ネオ」

「ええ……！ もっと他のがいい！ なあ、リュウヤ。アカシチみたいにさ、リュウヤの世界の料理で何か出来ないか？」

「ネオ……君ってグルメなんだね」

「ぐるめ？」

「いや、うん、まあ気にしないで。けど、困ったなあ」

後頭部を指で掻きながら、僕は果物を一瞥した。どれもこれも見知らぬ果物ばかり。形だけを見れば向こうと似ている物はあるけど、味がどうか分からない。それに果物を生で食べられない、というものも頭を悩ます原因だ。

「無理そうか？」

眉間に皺を寄せて悩んでいる僕に、ネオは心配そうに声をかけてきた。シュンとがっかりした様を見て、胸に苦い思いが広がった。ネオの期待には応えたい。せめて味さえ分かれば良いのだけれど。

「よし」

意をくくった言葉に、三人は息を飲む。僕は持っていた果物を副で擦り、勢いよく齧った。

## 第十二章

目をゆっくりと開くと、僕はベッドの上にいた。三人から与えられた部屋の天井、視界に入っている三人の心配した顔。目を覚ました僕を見ると、三人はホッと息をついた。

「ネオ……リラ……キラ……」

小さな声で三人の名前を呼んだ。すると、リラが怒ったような表情を見せた。初めて見る怒った顔だ。

「リュウヤのバカ！ 生はダメって言ったでしょ！？」

これまた初めて聞くリラの怒声に、僕はビクリして目を見開いた。

「ご、ごめん……」

そのあまりの勢いに、僕は喉に言葉がつまりながら謝った。それを聞き、リラは盛大に息を吐き出すと普段と変わらない表情になる。「二度と生で食べるような真似はしないで」

リラはペタンと床に座り込むと、顔をベッドに押し付けた。よほど心配させたようだ。僕はシュンと頭を垂れた。

「ごめん、リラ。でも味が分らないと、どんな料理にすればいいのか、分からなかったんだ」

「分かってるわ。ごめんなさい。私も怒りすぎたわ」

沈んでいるリラの頭を、僕は優しく撫でた。驚いた表情で僕を見てる。

「小さい頃、落ち込んだ僕の頭を撫でてくれたんだ。それが、とても安心できたから」

「……そうね。ありがとう、リュウヤ。でも、私たちのために無理はしないで」

「分かった。約束するよ。もう無茶はしない」  
「うん」

ホッと安心したような表情をしたリラに、僕も胸を撫で下ろした。

怒られたのは何年ぶりだろうか。ひきこもった暗い部屋で呼んでくる声は様々だった。それがノイズのように思えて、ヘッドフォンで蓋をして曲を聴いていた。そうすることで、自分が嫌だと思いうことを避けてきたんだ。

「リュウヤ？」

黙り込み、考え込んでしまった僕を、リラは心配そうに顔を覗いてきた。この時ばかりは、偽りの仮面をつけたように小さく微笑を向ける。

「何でもないよ。それより、さつき無茶をしたおかげで料理ができそうなんだ。また食べてくれるかい？」

「もうっ……大丈夫なの？ また魔法をかけようか？」

「大丈夫だよ。それじゃ、作ってくるから待つてて」

僕はベッドから抜け出すと、キッチンへと足を運んだ。扉を閉めると、微かだがネオたちの声が聞えてくる。

「何だか……変だったね、リュウヤ」

「ああ」

「さっきの……凄く冷たく悲しい顔。別人みたいだった」

「リュウヤにも何か……だよ」

「でも……こわ……」

三人の言葉が耳に届いていたが、あえて何も言わずに部屋から遠ざかる。距離が離れ、小声の会話が聞えなくなっていく。ついには何も聞えなくなった。

昼頃ということもあるせいか、キッチンには陽の光に照らされていた。電気をつけずとも十分な明るさだ。果物を袋から取り出し、それぞれ一列に並べてみた。味見をした果実はリンゴのような丸形の果物で、味は渋柿みたいだった。齧ったのは失敗だ。あれほど濃

厚な味なら舐めるだけでも分かるはず。

リンゴのような果物を脇に退け、他の果物を手に取った。サクランボのような小さな実が二つついていている果物やハート形の真っ赤な果物。種類は全部で三つだった。サクランボのような果物を舌で舐めると、リンゴの味のような瑞々しく甘い味。ハート形の果物は舐めただけで舌が燃えそうぐらい辛い味だった。

「辛味と甘味と渋味、か」

三つの果物を並べ、僕は頭を悩ませた。机にあった料理本をパラパラと捲っていく。しかし、これといった料理はない。

「あれにするか……」

僕は冷蔵庫からポルンを取り出した。蓋を開け、中身を確認する。

「これぐらいあれば……」

中身の量を目測し、ボールの中にポルンを全て流し入れた。ヨーグルトのような少しドロドロとした中に、種を取り、一口サイズまで切った果物を入れる。それを少しかき混ぜれば意図も簡単に完成だ。それをスプーンで一口味見してみる。

「……こんなものかな」

辛味と渋味と甘味が、生で食べたときより控えめな味が口の中へと広がった。

「これぐらいなら食べれるね」

スプーンを流しへと入れ、ラップらしき代物を探してみた。しかし、さすがにそこまではないらしく、鍋の蓋をボールに被せる。そして、それを冷蔵庫の中へとしまった。

### 第十三章

デザートが完成し、僕は三人を呼びに自室へと足を運んだ。部屋の中へと入ると、三人は僕のベッドの上で気持よさそうにスヤスヤと眠っていた。その固まって眠る三人に、フツと笑いが漏れる。風邪を引かないように下に強いていた毛布を引っこ抜き、彼らの上に被せてやった。

「ん……」

寝返りを打っては口をもごもごと動かす。僕は部屋んい一つしかない椅子へと座り、三人の寝顔を見つめていた。小さな体で必死に生きている彼ら。バグの倒し方を見ているとかなり戦ったことがあるのだろう。手馴れた連携だった。この小さな体に、彼らはどんな過去を背負っているのだろうか。

頭の隅でバグと呼ばれた物体を思い返してみた。真っ黒な球体が幾つも重なって出来た巨大な姿。キラは過去に柵を持つ者にしか見えないと言った。

「過去の……柵、か……」

呟いた単語に反応するように昔の記憶が脳裏へと蘇る。いくら消そうとも、いくら忘れようとしても出来ない記憶。現実にはリセットボタンはないのだ。そのことを今さら痛感してしまう。起きた出来事は覆すことが出来ないし、また無いことには出来ない。

胸を締め付けるような痛みを感じ、右手で服を掴んだ。胸の上、心臓がある辺りの服に皺ができた。目を閉じて集中すれば自分の鼓動が聞えてくる。しっかりと動いている、生きている僕の心臓。そのことが妙に不思議で、けれど実感できていることだった。画面に映し出されたあの文字の意味を、どうやら取り違えていたようだ。現世を捨てる「死ぬ、ということではなかったらしい。

「……生きてる……」

そのことが、こんなにも嬉しいなんて。あふれ出しそうになった

涙を腕でふき取りながらそう感じていた。生きていることが嬉しい。今、ここで彼らと居ることが嬉しい。それは単純な感情だ。けれど、そう思えるのは難しいこと。胸に広がるこの思いも、溢れてくる涙も、全ては生きている証拠なのだ。

いく筋もの涙を流したあと、僕は手の甲でそれを拭った。涙を抑え込み、自室から洗面所へと向かった。そこで冷たい水を顔にぶつける。タオルで顔を拭き、鏡で自分の顔を見た。そこに映る僕は、兎のように目が赤い。泣いたことと冷たい水が、ぐるぐると回転していた思考がすっきりさせた。

洗面所を出た僕は、三人が眠っている自室へと戻った。やはり、三人ともまだ眠っている。すやすやと寝息をたてる三人に被せた毛布を剥いだ。

「ほら、三人とも起きて。昼になるよ」

「ん」

「うーん……」

「……寝て、たのか」

三者三様の起き方に、ふと笑いがこぼれそうになる。

「そんなに寝てたわけじゃないけど………そんなに暇だった？」

そう聞くと、ネオは欠伸をしながら後頭部を掻いた。寝起きの良い彼にしては珍しい。

「頭使ったら眠くなっちゃった。それより、リュウヤ！ 出来たのか？」

「もうとつくに出来てるよ。でも、あれはデザートだから、昼食を食べてからね。それで、お昼は何にする？」

「外に食べに行くか？」

「えー、お腹減ってるから動きたくねえよ」

キラの提案に、ネオは起こした体を再び倒した。動きたくない、というアピールのようだ。

「リュウヤ、また何か作ってくれよ？」

「さっき作ったばかりだよ。それに、作るにしても材料買ってこな

いと。それまで、待てる？」

「うー……」

ムスツと頬を膨らませて唸る。どうやら限界みたいだ。

「分かった。すぐに肉を買って焼くよ」

そう言つと、リラが申し訳なさそうに片手をあげた。

「リュウヤ……言いにいくんだけど、私はお肉食べられないの」

「え？」

「エルフ族は木の実と花、果実ぐらいしか食べないの」

「そっか。あれ？　じゃあ魚は？」

「魚はね、滅多に食べないだけで、食べれなくはないの。魚はお祭りとか行事用のお肉として食べるだけ」

「つまり魚は良いけど、動物の肉は駄目、てことか」

「ええ」

「なら、リラはスープだな。この間宿屋で食べてたスープって何？」

「デュリユーテっていうの。木の実と茸のスープなのよ」

「木の実と茸、だね。ついて来て選んでくれる？」

「うん」

僕の誘いに、リラは快く頷いてくれた。

「俺たちは？」

目を輝かせているネオに、僕はニツコリと微笑む。その肩に手を置いた。

「キラと仲良くお留守番よろしく」

「ええー！」

予想通りの反応に、僕は些か苦笑する。キラをチラツと見てみるが、予想の範囲内だったらしく、小さく肩を竦めていた。

「俺も肉選びたい！」

「駄目だ、ネオ。お前はよく高級な物を買わされるんだからな」

「だって……」

「うーん……ネオが大人しく待つてくれたら、美味しいあぶり焼きが出来そうんだけどなあー」

腕を組んで、さも残念そうに演じてみる。

「ヴー……分かった。大人しく待ってる」

しょぼんと頭を下げて床に座った。相当落ち込んでしまったネオに、キラと目を合わせて静かに肩を竦めた。僕は罪悪感を覚えながら、市場へと足を向けた。

昼の市場は朝市より賑やかさが半分のように感じた。それでも、まだ賑やかな方だと思う。

「二人が好きな肉って分かる？」

市場を歩きながら、僕はリラに聞いた。彼女は少し考え込むと、小さく首を横に振った。

「二人が好きなお肉は分からないわ。人狼族は山羊肉、猫人族は雑食だって聞いたことはあるけれど、二人が好きなお肉は知らないの」

「山羊肉と雑食、か。やっぱり狼と猫みたいだ」

「オオカミとネコ？」

「動物だよ。僕の世界では、人語も話さないし、二足歩行なんてしなけどね」

「リュウヤの世界にはそんな生き物がいるのね」

「うん。狼は中々見かけないけどさ」

説明すると、リラは楽しそうに聞いていた。賑やかな足音が、突然慌しい音に変わった。その変化に気付き、僕らは足を止める。

「っ！」

近づいてきた一人を見るなり、リラが息を呑んだ。驚いて彼女を見ると、顔から血の気が引いている。ガクガクと震え、恐怖を浮かべた表情は、リラとは思えないほど青ざめていた。

「リラ？」

声をかけると、彼女は我に返ったように僕を見る。唇が震え、喋ろうとした言葉が出てこない。しかし、ハッキリと聞えた瞬間、リラは走り出した。

「リラ！」

驚いて名前を呼ぶが、彼女は立ち止まらなかった。近づいて来て

いた人も、リラが走り出すと後を追って走り出した。すれ違ふ寸前、リラを追う人物の姿が目には焼き付いた。リラと同じ髪の色と瞳、尖った耳。そして、見下されるほど背が高く、凍りつきそうな冷たい顔。

「リラ——ッ！」

走り去る二人の背中に向かって叫ぶ声は虚しく宙を舞う。走り出そうとしたときには二人を見失ってしまった。

『さようなら』

最後に聞いた台詞は小さく、震えていた。僕はすぐさまネオたち  
のいる隠れ家へと走り出した。

## 第十四章

家に入った途端、体が倒れた。今更ながら体が震え、思うように喋れなかった。二人の介抱のおかげで喋れるようになったときは、既に数十分が経っていた。

「何があつた、リュウヤ？」

「リラが……分からないけど、急に走り出して……それから、何かエルフっぽい人が、リラを追って……」

頭が混乱しているせいか、言葉がまとまらない。けれど、それだけで何かを察したのか、二人は急いで家を飛び出した。僕も追おうと体を起こすが、疲労困憊のようで再び倒れてしまった。握り締めた拳に力を加える。

「くそっ！」

動かない体が歯痒い。気持悪さが喉まで押し寄せてくる。それでも、体は疲れきっていた。そのことを理解し、冷静になろうと深呼吸を重ねる。ゆっくりと息が整い、体の力が抜けていく。

「……よし」

再び力を入れると、今度はちゃんと立ち上がることが出来た。僕はドアを閉めると、無我夢中で走り出した。

リラのことを龍也から聞いた二人は、カバドを当てもなく走っていた。慌てていた龍也の台詞からは何があったかは分からない。しかし、リラに危険が迫っていることは直感出来た。

「ネオ、二手に別れるぞ!？」

「ああ。俺は西に」

「俺は東を捜してみる。最悪の場合、日暮れには家に戻るぞ」

「ああ!」

素早く役割を決めると、二人はその場から別々の方向へと足を向けた。胸に嫌な予感が走る。それは二人とも同じ予感だった。

西に進んだネオは、嗅いだことのある匂いに立ち止まった。辺りの匂いをクンクンと嗅ぐと、彼の顔から血の気が引いていく。

「久しぶりだな、ネオ」

目の前に現れた同族の姿を見るなり、ネオは一目散に逃げようとした。しかし、一人だけではなかったようだ。三人の人狼族がネオを囲んでしまった。

「……キオンツ」

最初に現れた同族に向き直り、憎悪を込めて名前を呼んだ。キオンと呼ばれた青年は余裕たっぷりの笑みで、ネオを見下ろした。

一方、東へと向かっていたキラは足を止めていた。彼の周りにも猫人族が四人ほどいる。いつも服の下に隠してある小型のナイフを構え、キラは全身の毛を逆立てていた。

「退けっ、お前ら!」

「そんなちっさなナイフでどう戦うんだ? キラ」

「うるさい! 本来の素早さを捨てたお前らに何が分かる!？」

「素早さとは俺たちの誇り。猫人族にとっては、な」

「その誇りを失ったお前らに用はない！ さつさとテリトリーに戻れ！」

いつになく大声を立て威嚇するキラ。しかし、彼らには何の意味もないようだ。クスクスと嫌らしい笑みを浮かべている。

「俺たちは、お前を……」

音がかき消えてしまうような台詞に、キラは同族を睨みつける。

何の合図も無しに、互いの金属がぶつかった。

## 第十五章

当てもなく三人を捜して走り回った僕は、結局何の情報も手に入れられなかった。仕方なく家に戻り、静まり返っている中に入る。

「ネオ？ キラ？」

リラが居なくても、二人は居るだろう。そう思っていたのだが、どうやら外れたみたいだ。僕が出て行った後、誰も帰ってきていないようで、家の中はガランとしていて肌寒さを感じるほどだった。

「まだ、帰って来てないのか？」

嫌な予感が胸中に広がる。まるで胸の上に重たい石を乗せているように苦しい。

けれど、何かにしがみつくように、乾かしていた自分の椅子に座った。そこからホールが一望できた。広いホールにはテーブルと椅子があり、その向こうにはキッチンが見える。さきほどまで団欒としていた光景が頭に浮んだ。しかし、浮んだのは束の間。すぐさま幻は消え、他人の家ではないかと思うほどの静けさが広がった。煩いほど元気なネオ、おっとりとした性格のリラ、二人の突っ込み役のキラ。三人とも、いくら待っても戻ってこない。

「……」

いつしか外までも真っ暗になっていた。僕はただ無言で、三人の帰りを待った。自分の椅子に座り、テーブルに顔を押し付けている。しかし、眠気は襲ってこない。ましてやベッドに入ろうとも思わなかった。静けさのせいか、いつもより寒いと感じてしまう。色を失い、音を失った家は酷く物悲しい。その中を何も思わず見渡した。もう、三人の影は見えない。

「……ネオ、リラ、キラ……」

小さく呟いた声すら大きく感じる。けれど、返してくれる声はない。

そこにドアがバンツと荒々しく開かれた。驚いて向かってみると、

そこにはボロボロの姿になっているキラがいた。

「キラ！」

慌てて駆け寄ると、キラの体がゆっくりと地面に吸い込まれていく。倒れる寸前で、キラを受け止めることが出来た。そして、ソツと地面に座らせる。

「キラ！ 何があつた!？」

ぐったりしているキラに声をかける。閉じていた瞼がうつすらと開いた。陰った瞳が僕を映す。

「キラ……」

「……ネ、オたちは？」

掠れた声が耳に届き、僕は無言で首を振った。それに、キラは目を伏せた。

「一体何があつた？」

声をかけると、閉じられた瞳が再び開かれた。

「同族に……襲われた……」

「同族？ キラの？」

「ああ」

「どうしてキラを襲う必要があつたんだ？」

「……」

黙りこんだキラに、僕は怪訝な顔を向けた。しかし、枯れは力なく笑っただけで、何も話さない。重たい沈黙が流れた。

「……キラ、とにかく今日は休もう？」

「そう、だな」

まるで逃げるように、僕たちは自室へと閉じこもった。

## 第十六章

ベッドに倒れこむと、僕は溜めていた息を吐き出した。キラに何も聞けなかったことより、聞いてしまったことに後悔しているからだ。誰しも触れられたくない記憶<sup>モ</sup>がある。それを不用意に触ってしまったような感覚。触りたいと願っていなくても、傷つける意図がなくても、何気ない一言で全てを壊してしまう。地雷を踏んでしまったのだ。入られたくなくて張り巡らされた地雷を、僕は不用意に踏んだ。

「……」

こんなとき、ネオとリラが居て欲しいと心底思った。考えても胸に広がった苦味は拭えない。

「ネオ、リラ……」

どんなに思いを馳せても、二人から返事はない。暗闇が増す室内を見回し、目を閉じた。しかし、寝付けない。不安が胸を苦しめ、出口のない迷路へと思いが運ぶ。止まらなくなる。

「……」

一度大きく息を吐き出し、目を閉じる。耳で時計の音を聞きながら、シンと静かな暗闇へと意識を落とした。

翌日、キラとは気まずいままだった。けれど、今はそんなことを言っている場合ではない。それは、キラも一緒みたいだった。今は、何よりも二人を助けに行かなければならない。

「キラ、二人の居場所に検討つく？」

「おそらくアイツらの故郷……エルフの里と獣人谷だ」

「じゅうじんだに？」

「ネオたち、人狼族の領域だ。俺たちの世界には大雑把に分けると、人狼族、エルフ族、猫人族に分けれる。これらの一族が主な住人だが、一族とは違う種族は亜種といわれている。亜種の領域なんても

のを持たない放浪の一族。世界の中心的な街、このカバドで暮らしている」

「そつか。なら、二人の故郷に乗り込むのが手っ取り早いか」

「そう言うことだが……人狼族の鼻が厄介だ。それを考えると、リラから助けに行つたほうがいいだろうな」

キラの話を聞き、僕は息を吐き出した。二人を助けに行く。それは、彼らの問題に口を挟むということになる。連れ去られた理由すら分からないというのに。

助けに行きたい。けれど、足手まといにならないだろうか？

僕は戦えるわけじゃないし、ましてや武器を持たされても使えない。

「それでも……助けに行きたい」

僕はぐるぐると回転する思考を放り出し、有りのままに答えた。

「そうだな。それじゃ、助けに行つてやるか」

体を立たせ、キラはニヤリと笑う。そして、僕らは旅支度をしていく。非常食に、キラから借りた短剣。用意に集中しようとしていた。けれど、いくら思考を投げ出しても、考えずにはいられない。

自分に何ができるのか。

そして、最悪の状況すらも。

これは楽しい日々を取り戻すための戦いだ。それを深く心に刻むのと同時に、僕は袋の蓋を閉じた。

## 第十七章

準備が整い、僕らは地図を片手に持った。

「まずはリラを助けに行くぞ」

家を出ると、キラはそう言った。

「人狼族に侵入するにはリラの力も必要だ。人狼族が最も苦手とする攻撃魔法が、な」

「そういえばさ、前にリラが『魔法は本来日常的に使うことしか使わない』って言ってたけど、それってどういう意味？」

「まんまの意味だよ。エルフたちの魔法は本来、生活を手助けしてくれるもの。だが、稀にリラのような攻撃できる力に変わるらしい。それはごく一部だけの可能性。しかも、言い伝えもあるらしいからな」

「言い伝え？」

足を進ませながら、僕はキラを見た。しかし、彼は肩を竦める。

「俺も知らない。たぶん、エルフ族に伝わっている話だろう」

「そっか」

僕はキラから目を離し、地図にあるエルフの里を見つめる。そこで暮らしたリラはどんなことを思っていたのだろうか。どんな家庭で育ち、どんな成長をしていったのだろうか。そして、リラが抱える過去の柵。どんな過去が、彼女を苦しめているのだろうか。

「リュウヤ、皺」

「え？」

突然キラの声が聞え、僕はハツとして顔を上げた。隣を見ると、キラが眉間に指を当てている。

「これから助けに行こうってのに、そんな顔をすんなよ」

「あ、ごめん……リラは、どんな過去を抱えていたのかな、て思ってたさ。前に、キラ言ってたよな？ ネオもリラも過去に黒いものを持ってるって」

「ああ」

「それが過去の柵。なら、リラやネオは、一体どんな過去を持つて  
るんだろ？ 下手に手を出せば、二人を傷つけてしまわないかな？」

再び考え込みそうになる僕の後頭部が小さく叩かれた。そこに手  
を当て、隣を見る。キラは軽く肩をすくませた。

「お前が離れて行ったとき、俺たちはお前を追った。その時、お前  
は傷ついたか？」

「いや、嬉しかった。でも、三人を突き放したことに後悔した」

胸に広がる苦しみに顔を顰める。けど、いくら消そうとも消えな  
い。今でも罪悪感がないわけではなかった。それでも、一緒に居  
れることが何より嬉しくて、罪悪感以上のものが、苦しみを紛らわ  
せてくれた。

「でも、そんな感情よりも、何よりも一緒に居ていいことが嬉しく  
て楽しかった」

「そう思うならいんだよ。特別な理由がなきゃいけないわけじゃな  
いだろ。助けたい、それ以上も以下もない。助けたいから助けに行  
く。それだけで十分だ」

「そっか。何か、すごい持論だな。キラもそんなこと言うんだ？」  
驚いた顔をキラに向けると、彼は遠くを見つめるように目を細め  
た。

「あいつらの居場所は俺たち（ここ）で間違いないだろうからな。  
どうだ？ 少しは吹っ切れたか？」

「……うん、ありがとう」

胸に手を当てると、先ほどまで感じていた戸惑いがなくなってい  
た。例え迷惑だと思われても、突き放されたとしても、三人が追い  
かけてきてくれたように、僕も追いかけていく。もう過去（あの時）  
のような過ちを犯したくない。

「行こう。エルフの里に」

広げていた地図を丸め、袋にしまった。目指すはカバドから西に  
あるエルフの里。まずはアクアラインを跨いだ向こう側のカバドに

渡らないといけない。

トコトコと歩いて、ようやく目前にアクアライン跨ぐ橋が見えてきた。

「ここを渡れば西カバドだ」

僕は足元にある橋を見た。見た目は頑丈な煉瓦造りのようだ。

「この橋はアクアブリッジって言って、水の架け橋って意味だ。アクアラインを跨ぐこの橋は、唯一向こうとこちら側を結ぶ大事な橋だから、bridge（架け橋）って名前をつけたらしい」

「水の架け橋……アクアブリッジ」

足から伝わる橋の感触。柔らかいわけではなかった。むしろ、地球の石橋みたいに頑丈で硬い。ちよつとやさつとの衝撃なら耐え抜ける強度だろう。

「いつまで、立っているつもりだ？ 行かないのか？」

「行くよ」

橋を踏みしめていた足を、ようやく動かす。向こう側へは、まだ遠い道のり。微かに見える西カバドを目指して、僕らは前に進んだ。

## 第十八章

西カバドの姿は、僕たちがいた東カバドと大差なかった。けれど、売り物は水を中心とした物が多い。キラに聞けば、水源であるエルフの里や獣人谷が西カバドより近いから、らしい。それでも、獣人谷はアクアラインの直線上にあるから、東カバドにも水の供給はあるようだ。しかし、西カバドに比べれば少ないもの。東カバドが食料売り場なら、西カバドは水売り場といったところだろうか。

辺りの出店に目をやりながら、僕たちは更に西を目指していた。カバドを抜け、草原を抜ければ、エルフの里に着ける距離だ。

「歩き続ければ約一日。夜には着ける。後は闇に紛れてリラを助け出す」

「ああ。エルフ族は、仲間には寛大でも、裏切り者には容赦ない一族だ。聞く限りじゃ、リラは仲間を恐れている。だとしたら、裏切り者だと判断していいだろう。警備は厳しいだろうな」

「僕たちが行くまで無事だといいいけど……」

「そうだな」

重苦しい空気のせいか、体まで重たく感じる。気を張っていないければ倒れてしまいそうだ。

僕たちは西カバドの出入り口から、草原へと足を踏み入れた。

龍也と分かれてから、数分後にリラは捕まっていた。一目見た瞬間から、彼女は彼に恐怖を覚えていた。何故なら、その同族の首にあるものをかけていたからだ。それは小さな獣の爪。そして、凍り付いてしまいそうな瞳。獣の爪を首から下げている同族は裏切り者を討伐する任務を受けている証だと、母から教わっていた。だからこそ、リラは龍也から離れたのだった。一緒にいれば、彼もただでは済まないだろう。そして、ネオやキラの身も危険になる可能性がある。仲間を捕まえさせるわけにはいかなかった。

「……」

今、彼女は冷たい牢屋の中にいた。少女の手には似つかわしくない鉄の鎖が自由を奪い、一日の時間が過ぎた。牢屋の外には二人の見張り役が立っている。彼らの首にも小さな獣の爪が吊るされている。だが、リラは逃げようとも思っていない。

ただ、自分の死を漠然と感じていた。

## 第十九章

ようやく見えた深い森を目の前にし、僕とキラは足を止めた。この森の中に里がある。リラとの距離は目と鼻の先だった。しかし、既に夜中ということもあって、森は薄気味悪さを増している。中に入れば、足元すら見えない。

「リュウヤ、ロープはあるか？」

「うん、あるよ」

肩から提げている袋を下ろし、少し長いロープを取り出す。それを受け取ろうと振り向いたキラの目を見て、僕はドキリとした。闇夜に浮ぶ金色の瞳。その様はまさに猫だった。

「俺は夜目が利く。そのロープで俺たちを結んで森を抜けるぞ。足場が悪いときは俺が教える。難しいだろうが、出来るか？」

それに応えるように、僕はロープを渡した。闇闇で、キラの顔は見えない。けれど、何だか笑った感じがした。彼は無言で僕の体にロープを結んだ。

「リュウヤ、平気か？」

「多分、大丈夫」

「……なんだつたら手でも繋ぐか？」

「いや、それは足場が悪いときに頼むよ。多少慣れてきたら見えてくるはずだから。キラは目しか見えないけど、手元のロープは見える。多少歩幅を合わせてくれたら、大丈夫だと思う」

繋がれたロープを手にとって言う。見えると言っても、はっきりではない。うっすらとしか見えなかった。

「行くぞ、リュウヤ」

「ああ」

キラが進み始めた。腹に巻いたロープが引っ張られ、僕も歩き出す。そして、僕たちは暗闇へと踏み込んだ。

## 第二十章

踏み入れた森は、特に足場が悪いわけではなかった。キラの指示通りに木を避ける以外に、これといって障害物はない。そして、僕の視力も調節出来たようだ。昼間ほどではないが、うつすらと木々の配置が分かるようになってきた。

「キラ、そろそろ目が慣れたみたいだ。だいたいなら見えてきた」  
「なら、そろそろロープを外すか。里にも近いみたいだからな」

キラの目が空へと向かう。つられて空を仰ぐが、木の葉に遮られているためか、暗闇しか見えない。しかし、微かに焦げた臭いが鼻を擽った。里が近い証拠だ。

腹の辺りで繋がっていたロープが外れる。それを一まとめにする  
と、僕に渡してきた。ロープを受け取り、袋へとしまう。

「特に障害物は見当たらないが……エルフ族は用心深いからな。油断は禁物だ」

「ああ」

キラの影がゆつくりと動いた。僕はキラを見失わないように、しかしゆつくりと歩いて行く。進めば進むほど、臭いがはつきりしてくる。火が燃える音が耳に届く。そして、前方がほんのりと明かりが見えてきた。

「あった。エルフの里だ」

ユラユラと揺れる松明が、門を照らしている。隣にいたキラの気配が消えた。すぐ近くにある木がカサカサと揺れる音が聞える。

「入り口付近に二人。どうやって侵入する？」

「入り口はどんな風になってる？」

「木で出来た門があって、その前に二人のエルフ族がいる。一人は槍、もう一人は弓だ」

「門がある上に武器持ちか。暗闇を味方につけても、簡単にはいかないな。門を越えてける高さ……じゃないよね」

「俺一人なら越えられる高さではある。」

「なら、僕には無理だ。交渉したところで相手にしてくれないだろうし」

「下手に出れば無残なことになるだろうな。エルフの里に、他の種族たちは近づこうともしないし、こんな真夜中だ。余計に警戒させるのが落ちだ」

スツと、キラの瞳が近づいてきた。金色の瞳は門へと注がれたままだ。キラを見ていた目を、再び門へと向ける。明々と照らす松明のおかげで、キラが言っていたエルフたちが見えた。二人は無言で前方だけを見ている。しかし、気を抜いている様には見えない。おそらく、辺り一面に気を張っているはずだ。カバドでは感じなかった緊張感が背筋を凍らせる。しかし、怖じ気手居る場合ではない。一刻も早く、リラを助け出さないと。

「……キラ、片方なら気絶させれるか？」

「一人なら。だが、二人は少し無理だ」

「なら、僕が片方を引きつけるから、そのうちに残った奴を頼む」

「引きつけるって、どうやって？」

「古典的な方法だけど……まあ、見てて」

そう言っ、僕はゆっくりとキラから離れて行く。袋にしまったロープを取り出し、手探りで木の柱にくくりつける。片方を手に巻きつけ、準備は完了。僕はキラに向き直り、頷いて見せ、近場にあった小石を投げて草むらを揺らした。すると、二人いたエルフ族のうち弓を持っていた一人が僕の方へと近づいてくる。彼の足が草むらに入ろうとした瞬間にロープを一気に引っ張った。木に結ばれていたロープがピンツと張られ、エルフ族の足を引っ掛けた。しかし、すぐさま受身を取られてしまった。

「……チツ……」

軽く舌打ちし、彼の背後へと回った。いまだ無防備なエルフの首に手刀を入れる。その体は小さな悲鳴を上げ、暗闇へと倒れた。もう一人に顔を向けると、彼の体も地面へと倒れていく。どうやらキ

ラも、相手の足元を崩させたようだ。エルフ族が動かないことを確認し、こちらに手を振ってくる。それを見て、キラに近づいた。

「真正面から行くしかないよね、多分」

「ま、一口があるわけだしな。だが慎重に、だ」

「そうだな」

僕たちは絵の前にそびえる門へと手をかけた。重たい門をゆつくりと開け、里の中を見回してみる。さすがに夜中ということもあるのか、道通りに人影は見えない。しかし、家々の窓から明かりが零れている。家の造りはログハウスのようだ。頑丈で、太目の丸太を組み合わさって出来ている。

窓から零れる明かりのおかげで、道や建物が分かった。だが、やたら明るい場所が目についた。隣を歩いていったキラに目を向けるとコクリと頷いてくる。僕も無言で頷くと、明るい方へと向かった。

家の角から覗いてみると、明らかに怪しい建物があつた。しかも、数人の警備兵らしき姿もある。彼らは無言で別々の方角を見張っていた。

「警備兵だな。だとしたら、あそこにリラがいる」

「匂いでもするのか？」

「焦げ臭い中に、微かに、だけどな。お次は、どうやって忍び込むか」

「あの時のやり方は無理だな。人数が多い。居ないことを願ってたけど……そうも言っていない。どうにかして入らないと」

「そうは言っても、どうする？」

キラに問われ、僕は考え込んだ。その時、ふと建物の先にあるものが目に飛び込んできた。それは、どうやら湖のようだった。明かりを反射して、ユラユラと揺れている。キラに聞いてみると、彼も同意した。どうやらあの湖畔がエルフ族の水源なのだろう。

「あそこから建物に近づくか。それとも、水を使って音を立てるか」

「どちらにしても、子供だましにしかない。数人とはいえ、全員が離れるわけないしな」

すぐさま否定され、僕は苦笑を漏らす。そのとき、急にノイズのような音が響いてきた。その聞き覚えのある音に、僕は眉を顰めた。「どうした？ リユウヤ」

僕の様子に気付いたらしく、キラが声をかけてくる。だけど、それに答えている余裕がなかった。僕は知っている、この感覚を。この音を知っているんだ。

「……アイツが、来る」

「あいつ？」

体が震えてくる。その振動に合わせるように、黒い小さな玉がいくつも地面から出てきた。

「バグ……」

呟いたキラが近いはずなのに、遠くに聞える。そんな矛盾を感じている僕の手で、バグは一つへと集まっていた。

悲鳴が当たりに響き、僕たちは困惑した。何故なら、バグは過去に柵を持つ者にしか見えないからだ。しかし、目の前に現れたバグを、明らかに他のエルフたちは認識していた。

警備兵達の悲鳴を聞いて、家に入っていたエルフたちがソツとへと出てくる。彼らもまた、バグを見るなり声を上げていた。バグはそんな人々に目をくれず、リラがいるであろう建物を呑み込んだ。

「っ……リラっ！」

僕は堪らずに叫ぶが、その声は人々の悲鳴の渦に吞まれていった。「リユウヤ！」

走り出した僕に向かって、キラが叫んだ。しかし、制止する声を振り切って、僕はバグに向かって直進する。腕で顔を守りながら、バグの中へと突っ込んで行った。

## 第二十一章

ドロドロとした感触に気持悪さを覚えながら、僕は建物へと近づいた。中は、まるで水のようにだった。綺麗な水のように視界はいい。黒い物体の中に突っ込んだはずだったのに、中のほうが明るいなんで。

だが、肌触りは最悪だ。まるで泥水に浸かっている気分だった。そして、意外なことに息苦しくない。呼吸がちゃんと出来る。

あらゆることに驚いた。建物の中に入っても感覚は変わらなかったが、そこには記憶が存在していた。今、僕は牢屋の前まで来ている。もちろん中にリラの姿がある。彼女は重たそうな枷を掛けられ、体育座りで顔を伏せていた。しかし、僕とリラの間には、小さなリラがいるのだ。今より、ずっと幼い、見た目的に言えば五、六歳という年頃に見える。そして、虚ろな瞳が僕を捉えていた。

「……君は？」

「リラ」

名前を聞いても、少女はずっと同じ答えだった。

「どうしたの？」

「……」

質問を変えれば、何も答えてくれなくなる。途方に暮れた僕は、彼女と視線を合わせた。

「リラ、何か言いたいことがあるんじゃないの？ 言ってみてよ」

「……」

「僕たちは君を助けに来たんだ。だから、言っていいんだ。だって、僕たちは友達だろ？」

「とも、だち？」

「うん」

ようやく反応してくれ、ホッと胸を撫で下ろす。だけど、次の反応のほうが、僕はビックリした。リラは大きな瞳から、ボロボロと

涙を流していたのだ。そして、彼女は悲痛な声を上げて話してくれた。

『お父さんも、お母さんも……みんな……みんな、私を嫌っているの！ いつも姉さまと比べて、身長だって低いって……わたしはわたしなのに！ 魔法だってそうよ！ わたしの魔法が、危険だって言って！ みんな、私を嫌っていじめるの！』

泣きながら話す彼女を抱きしめ、背中を優しく撫でる。しかし、泣き止む気配がない。僕の服を握ると、彼女は更に声を上げて泣いた。

彼女をあやしている最中、僕はリラの記憶を見ていた。脳内で繰り広げられる記憶。まるで、夢を見ているようだった。

## 第二十二章

今から七年前。エルフの里にリラという少女がいた。彼女はエルフ族の中でも身長が一番低かった。年々成長していく周囲の反応は、伸び悩んでいたリラに対して冷たい反応しかしない。

ある日、リラは一人で魔法卵を練習していると、変化が起こった。単なる火を灯す魔法が、火の玉へと変わってしまったのだ。それから、彼女の魔法は攻撃的なものへとなっていく。彼女は、さまざまその事を母親に相談した。彼女の魔法を見た瞬間、母親の表情が強張った。そして、いきなり少女の顔を叩いた。

『……呪われた子……』

呟かれた言葉と共に恐怖の色が、その顔に現れていた。

記憶は断片的に流れていく。そうして、リラの記憶を覗いていくうちに、引つ掛かっていた謎が解けていった。

彼女の十二歳目の誕生日の夜。一族の大人たちだけの会議が行われた。子供たちは寝静まっているはずの時間帯で、リラはその会議を盗み見ていた。それは母親から叩かれた日から行い始めたことだった。自分の身が危険だと、どこことなく感じていたからこそその行動だった。そして、あの言葉を聞いてしまったのだ。

『エルフの魔法が変わった者は心が醜い証拠。心の醜さは一族に不幸をもたらし、いつしか反逆の道へと進んでいく。牙を向く前に捕らえるのだ。そして、極刑を与えよ』

リラは長の言葉を聞いてしまったのだ。魔法が変わってしまったから七年目の月日が流れても、一族の態度は冷たいまま。ずっと孤独に耐えていた彼女を突き放す言葉を、心を壊してしまうような決断を、聞いてしまったのだ。危険と確信してしまった彼女は、十二歳となったその日の夜、里を抜け出した。

## 第二十三章

里を抜け出してからは、ネオと会い、キラと会い、そして僕と出会った。しかし、彼女は毎日怯えていたのだ。僕たちの前では楽しげに笑っていたのに、その心は一族に対する恐怖心で一杯だった。だがからこそ、捕まったときに覚悟をしていたらしい。何の抵抗もせず、この牢屋へと入れられた。

「リラ……」

いまだ泣きじゃくる少女の頭を撫でながら、その先にいる当人を見つめる。リラに反応はない。ずっと同じ姿勢のまま、眠っているように動かなかった。

「……ねえ、リラ」

そんな彼女に、僕は話しかける。何の反応もしなくても、それでも口を閉ざさない。

「リラの魔法、僕は好きだよ。バグに襲われたとき、助けてくれたよね？ リラの魔法は誰かを救えるんだ。誰かを救える魔法が、醜いはずない。魔法だって使い方次第だろ。正しいことに使うなら、どんな魔法だって悪いものなんてない。リラ、少なくとも僕は、君の魔法が好きだよ」

「『わたし、は……きらわれ……もの……こころが、みにくい』」  
「違う！」

二人同時に喋る声を遮った。僕は少女のリラの肩と、牢屋の柱を掴んだ。

「リラ、違う！ 君の心は綺麗だよ！ 純粹すぎるくらい綺麗なんだ！ だから……皆の言葉に傷ついてしまふ。無垢な心だからこそ、君は苦しんでいたんだ。きつと……ううん。魔法は君を守るために変わったんだ。だって、魔法が変わっても、君は誰かを傷つけるためには使わなかった。誰かを助ける術として使っていた。そんな君の心が醜いなんて有り得ない！ リラ、思い出して……僕は君たち

に救われたんだ。ネオやキラや、君に」

「『…………』」

ゆっくりと、リラの瞳が開いていく。泣きじゃくっていた幼い少女の声も段々と小さくなっていた。

「ありがとう、リラ。君が居てくれた良かった」

「リュウ…………ヤア…………」

漸く反応を見せた彼女は、少女と同様に大粒の涙を流していく。

僕は出来る限り牢屋の中へ腕を伸ばした。僕の腕へと飛び込んできたリラを抱きしめると、彼女は声を上げて泣き出してしまった。けれど、その声は悲痛の音色だけではなかった。心の中に溜まっていた感情が溢れ、涙を流した分だけ楽になっていく。そんな風に思え、僕は泣き終わるまで彼女の頭を撫でていた。

リラが泣き終わる頃、気付けばバグの姿はなく、あの少女も居なくなっていた。騒動が終わりを迎え、僕たちは不法侵入ということに捕らえられてしまった。しかし、里の一大事を救った功績を認められ、どうにか話は聞いてもらえるようだ。夜半ばということもあり、急遽用意された宿に一泊することとなった。

宿屋のベッドにもぐっても、眠気は襲ってこない。今日の出来事を振り返ってばかりだ。バグの事や、その中で起きた事は分からないが、あそこに居た看守たちの記憶もあってエルフ族に伝わる言い伝えとやらは分かった。もしかしたら、リラを戻すことだって可能かもしれない。けれど、もしリラと一族の和解に成功し、彼女が残りたいと言ったら？

僕たちは止められない。だけど、和解させたくないわけじゃない。リラ自身が選んだ結果なら、それは彼女の幸せだ。余計な横槍を入れるべきではない。

「はあ…………」

何度目かのため息が口をつついた。少し間があるとはいえ、隣に眠っているキラは聡い。案の定、起こしてしまったようだ。

「眠れないみたいだな」

「やつぱり、起こした？」

「いや。俺も今日のこと、頭が一杯で寝付けないとこだ。眠ったふりをしても眠れない」

キラは体を起こして肩を竦めた。暗さのせいか、彼の目が光って見える。

「ねえ、キラ」

「何だ？」

「もし、リラを一族と和解させれたら……もし、リラが一族と居ることを選んだら、どうする？」

「……リラが自分自身で決めたのなら、その道を認めるだけだ。誰に左右されることなく、リラ自身が選んだのなら、それはもう口出し出来ることじゃない。ここに残りたいなら残ればいいさ。それを決めるのはリラだ。俺たちは、ただアイツの進む道を応援してやればいい」

「……そうだね。ごめん、らしくないこと聞いた」

「いや」

納得したらしい僕を見て、キラはベッドへと潜った。見えていた目が暗闇に溶け込み、僕も目を閉じる。いまだに納得したくない自分を押し込め、夜が明けるのを待った。

## 第二十四章

朝の支度を済ませた頃合いで、長の使いが部屋を訪れた。彼に付いて行き、僕たちは長が住んでいる家へと招かれた。居間には長が座っており、指示されるままに座布団らしき上に座った。特にフカフカという感触はないが、そこに座ると、長と対峙した形となる。長は見た目的に三十代というところだろうか。イメージしていた長像とは随分と違った。

「まずは、この里を救ってくださったことに礼を言います」

凜とした声とともに、長は一礼してきた。慌てる様もなく、僕も一礼を返す。

「いえ。こちらこそ、不法侵入してすみません」

「聞いたところによると、お二方はリラのご友人、とか」

「はい」

「しかし、あの者は大罪人。もし、救いに来たのであれば即刻立ち去ってもらいたい」

開かれている瞳には、長としての威厳が現れていた。体にヒシヒシと伝わってくる警戒心。そして、他者を受け入れようというものが、全く感じられない。

「……そのことで、少し話をお聞かせくださいませんか？」

僕の質問に、長は探るような視線を向けてきた。僕はその視線を真正面から受け止める。暫く沈黙が続いたが、長は目を伏せたことでそれを破った。そして、声だけが部屋に響く。

「何をお聞きになりたいのですか？」

「エルフ族に伝わる言い伝えを」

「言い伝え？ それをお聞きになりたいのですか？」

「はい。お願いします」

「言い伝えといっても、ほんの些細な話です。魔法が変わってしまった者が、次々と仲間を襲い、同族の手によって裁かれる。そんな

お話です」

淡々と話す長をジッと見つめる。それに怯んだ様子もなく、長は僕を見返してくる。その目は何とも冷たい色しか映していない。

「リラは……自分の心は醜い、と言っていました。その理由も、あの中で知りました。だけど、納得出来ないのです」

「納得出来ない、とは？」

「言い伝え通りなら、魔法が変わってしまった者は同族を襲い、その脅威を怖れてその人物を裁いたことになっていました。しかし、リラは魔法が変わっても、誰も襲っていません。それなのに、彼女を裁く必要があるのですか？」

「……仲間を襲うから危険なのではありません。魔法が変わってしまったことが重要なのです」

「何故、そこが重要なのですか？」

「魔法が変わるのは心が醜いという表れなのです。心が醜いというのは、いつしか本人すらも歪め、私たちを襲ってきます。そうなるからは遅いのです。小さな種のうちから除去しなければならぬのです」

「子どもでも、ですか？」

「その通りです。現に、リラは魔法で里を襲おうとしました。あの怪物が何よりの証拠です」

長の言葉を聞き、僕は立ち上がっていた。初めて崩れた顔で僕を凝視してくる。

「バグは……あれはリラの魔法ではありません！」

バクバクと脈打っている心臓の音が聞える気がした。だが、それよりも、僕は衝動的に動きそうになった体を抑えている。出かけた右手を左手で抑え、長を見つめていた。その時間がやたら長く感じる。しかし、次に出た台詞は冷静な色を宿していた。

「あれは、リラの悲しみに引き寄せられただけだと思います」

「悲しみに引き寄せられた？　どういうことだ？　リュウヤ」

漸く口を開いたキラは、困惑した顔を向けてくる。それをチラリ

と目を向け、再び長に向けた。

「まだ憶測ですが……あれは極度の悲しみに陥ったリラに引き寄せられたものだと思います。僕たちはあれをバグと呼び、バグは過去に柵を持つ者にしか見えない存在だと思っていました。しかし、昨晚の人々の反応で、それが違っていたこと気付きました。バグは過去に柵を持つ者に引き寄せられていたんです。実際、あの中で、僕はリラの記憶を見ました。バグの中にいた彼女はずっと、嘆き悲しんでいました。長、あなたはリラの苛めを知っていたはずです。何故、止めなかったのですか？ 苛めを止めてさえいれば、リラはあそこまで傷つかなかった。魔法が変わってしまうほど傷つきはしなかった！」

バグの仲での出来事が頭を巡る。リラの悲しみが、今でも胸に広がっていた。

「魔法が変わってしまうほど？ どういう意味ですか？ 魔法が変わってしまった者は、その者の心が醜い証拠。心の醜さは、その者の定めです」

長の言葉に、僕は背筋が凍っていく気がした。リラの魔法が変わってしまった原因を、いまだに理解出来ていないのだ。

「心が醜い者に、悲しむことがありますか？ 彼女はずっと悲しみ、傷ついていました。それは心が醜いからではありません。純粹だからこそ、彼女の魔法は彼女を守るために変わったのです。何故、魔法が変わってしまったのか……居間のあなたより、僕は理解出来ません。言い伝えに縛られているあなたに、本来の魔法を理解出来ません！」

僕は静かに、しかし、力強く断言した。その台詞に、長は睨みつけてくる。

「魔法はエルフ族の力。余所者に理解出来るほど単純ではない！」

ここまできて、漸く長は声を荒げた。穏やかな表情は剥がれ、憤慨した表情となる。だが、僕も引きはしなかった。

「いいや。あんたたちは言い伝えに囚われ、魔法の本質を見ていな

い！ 魔法が変わった原因を心の醜さだとしかなわないあんたたちに何が分かったって言えるんだよ！？」

「なっ……！」

「魔法が変わったのは、彼女自身を守るためだ。だけど、リラは誰も傷つけてはいない。それどころか、僕を助けてくれたんだ。なのに、どうしてリラの心が醜いって言える？ むしろ醜いのはあんたたちだ！」

「リュウヤ！」

「っ！」

捕まれた腕を咄嗟に払った。目を向ければ、静かに見据えているキラの瞳とぶつかる。彼は静かだった。怖いと思うほどの静けさ。それは冷たいとは違う恐怖。

「リュウヤ、落ち着け」

「……」

静かに諭された言葉に、冷静な思考が戻ってくる。長に目を向けると、彼は酷く怯えていた。だが、彼の目から理解していないことが分かる。どれほど説明しても、いくら言っても、きっと聞き入れてもらえない。そのことが、何の躊躇いもなく受け止めることが出来た。理解しないのではなく、出来ないのだろう。言い伝えを信じ、それに従順な彼らは、それ以上の追求しない。魔法が変わるのは心が醜い証。そうとしか理解出来ないのだ。

「あなたがリラを処刑しようとするなら……僕は彼女を奪い返します。止めたいのなら、ご自由にしてください。そのときは、あなたたちが恐れたあの怪物とやらを引き寄せてみせましょう」

僕はそれ以上の会話をしたくなり、口を閉ざした。和解出来るかもという考えが甘いことに今更気付き、エルフの族長を追い詰めてしまったのだ。長が立ち直る前にリラを救い出し、逃げなければ。彼らの手が届かないような場所に。ネオの救出もあるのに、いつまでもこの里に居続けるわけにはいかない。

僕は無言で部屋を歩き、長の屋敷を出て行った。キラも無言でつ

いて来る。彼は何も言ってこない。

「……甘かった。魔法が変わる原因を、醜さだけに囚われた考えを変えれたら、和解出来る。そう思ってた。でも、結局ケン力を売ったことになるよな、あれは」

供養しながら肩を竦め、僕はキラに目を向ける。彼からは何も読み取れない。無表情な、そんな顔を向けてくる。

「後悔してるのか？」

「それが、全然。ああ言ったのは本音だし、微塵の後悔もないよ。ただ、自分の甘さに頭が痛くなってきた」

「後悔がないなら、さっさとリラを助けて、ネオを助けに行くぞ。」

人狼族は、エルフのように辛抱強くない」

「早く助けに行かないとまずい、てことか。走ろう、キラ。今なら警備兵だって襲っては来ないはずだ」

僕たちは喋っていた口を閉じ、走り出した。思った通り、警備兵は僕たちを襲ってこない。長と対面出来、一応客人として認められているからだ。後は、長にケン力売った事態を知らされていないうちに、リラを助け出すだけ。明るい日差しが道を照らし、夜ほどの不便さが夢のようだった。

## 第二十五章

目的の建物を見つけ、難なく中に入れた。リラが閉じ込められている牢屋まで来ると、彼女は心配そうな顔を向けてくる。

「リュウヤ、キラ……大丈夫？」

「うん。長と話したよ。リラ、一つだけ質問に答えてくれる？」

「うん」

「……また一緒に暮らしたい？」

「うん……出来るなら、私は皆と一緒に、また暮らしたい。今度は家出じゃなくて、この一族から一人立ちするって意味で」

「……」

認めてもらいたい。そんな彼女の気持が、肌を突き抜けて心臓にまで届いてくる。彼女は一步前進したのだ。言いたいことを吐き出し、自分の過去に打ち克った。それは、本当に嬉しいことだ。なのに、エルフ族の長は理解してくれなかった。出来る事なら、和解させたい。けど、それには恐らく長い時間と実物を見ていく外ないのだろう。言い伝えに縛られず、ありのままを受け入れる。それを出来るようになるまでの時間がない。僕たちには、それに付き合う暇がないのだ。

「そうだった！ リュウヤ、キラ、見てて？」

「え？」

考え込む癖がついてしまったのか、いつの間にか俯いていた顔を上げる。目の前にいるリラは両手を少し広げた。その間から、ポウツと優しい色の玉が姿を現した。それに僕たちは目を見開くが、警備兵のエルフ族は、もっと大きく見開いている。

「見て！ 私、火の玉しかなかった明かりを灯す魔法が、やつと使えるようになったの！ 真空の刃だったフライの魔法も……ほら！」

自分の体を浮かせて楽しそうに話すリラに、僕たちは暫く呆然と

見つめていた。今までリラは自分の魔法を使うところを見せたことはない。そして、エルフ族側は、変わってしまった魔法が元に戻ったのが不思議で堪らないみたいだ。リラと同じ魔法を使っては確かめている。

「あれ？　もしかして……魔法が戻ったらお咎め無しなんじゃあ……」

「だな。あのおっさん、魔法が変わったことをやたら気にしてたかな。元に戻ったなら、万事解決だろ」

キラが同意してくれ、僕は胸が一杯になってきた。

それから、僕の態度にまだ呆けていた長を無理矢理リラの前まで連れて行った。彼女の魔法が元に戻ったことを不思議がっていた長だったが、僕はそれを上手くあしらった。都合のいいときだけ説明を求められるのは癪だったからだ。

でも、僕もリラから魔法を見せられたときは驚いた。けど、何も不思議なことではないことに、後から気付いた。自己防衛本能で、リラの魔法が変わったのだ、と考えていたのだ。リラが自分の過去から引きずっていた葛藤、それを乗り越え、前進出来た。それは自分の殻に閉じ籠もり、必死に守り続けてきた自分を昇華出来たということ。自分自身を縛り、苦しめていた彼女は、自分を責めてきていた一族を受け入れることで過去の柵を断ち切ったのだ。

「これで、リラは開放されますよね？　魔法は、あなたたちが望む普通の魔法となったのですから」

「……う、うむ……」

「それから、リラは僕たちと一緒にいきます。彼女自身がそれを望んでいるのですから」

「長、私からもお願いします。私はこの里から出たことで、大切な友人が出来ました。その友人たちと、まだ一緒に生きていきたいです。今度は、家出ではなく、一人立ちということで許可を頂きたいのです」

「しかし、お前はまだ十二。年齢的にも三年早過ぎる」

「でも……ネオやキラ、リュウヤに出会いました。彼らと共に居たから、一族から離れても、こうして生きてこれたのです。ですから、今一度、お願いいたします」

渋っていた長は、リラのお辞儀に目を見張った。その姿は、まさに一人の女性だ。女の子ではない。顔を上げたリラは、どこことなく成長したような、逞しい顔つきをしている。

「……良からう」

暫しリラを見つめていた長は、呟くように言った。それを聞き、僕たちは目を見合わせる。

「ただし、一つ条件がある」

「条件、ですか？」

「成人の儀までに精進し、またここに戻ってくるのだ。そのとき、お前次第ではこの先での暮らしを検討していく。無論、両親とも相談して」

「長……ありがとうございます！」

再びお辞儀をしたリラは、今度は年相応に見えた。ニッコリと笑った顔は十二歳そのものだった。

リラの手から重たい枷が外れ、牢屋から開放されて、ようやく助け出すことが出来た。牢屋から出たリラは、少し眩しそうに外の世界を見つめていた。しかし、まだネオの救出が残っている。今こうしている間にも、彼の命が無事であるかどうかは分からない。けれど、助けに行かなければ。四人が揃わないと意味がないんだ。誰も欠けてはいけない。誰一人、欠けさせたくない。

「行こう、二人とも」

見送るエルフ族に手を振り、僕たちは彼らの里を後にした。

## 第二十六章

里からある程度離れると、僕はリラあに現状を話した。歩きながら話すと体力を奪われるが、今は時間が惜しい。話を終えたとリラの顔から血の気が引いている。それと同時に、その瞳に強い光が宿った。

「早く助けに行かなきゃ。谷は険しいけど……今ならフライで、あの程度までなら連れて行けるわ」

杖を握りしめ、リラは言う。僕はふと気になったことを聞いてみた。すると、彼女は珍しくいたずらっ子のような顔をする。

「確かに私の魔法は元に戻ったけど……大丈夫！一族には言わなかったけど、攻撃も使えるの。あれから二種類の魔法が使えるようになったみたいで、人狼族が苦手としている魔法は任せて」

「そうだったんだ。でも、よく人狼族が魔法を苦手に行っていることが分かったね」

「前に、ネオとキラがケンカしたときに止めようと魔法を使っちゃったことがあって。“浄化の産声”って魔法、リュウヤも知っているでしょ？」

聞き覚えのある単語に、僕は数日前の記憶を掘り起こした。バグに襲われた、あのときだ。ネオがバグを貫き、リラの魔法で振り払った。

「うん、あの時だね」

それはほんの少し前の話なのに、かなり昔のことのように思えた。その感覚が面白く、口の両端がつり上がる。

「あの魔法は、本来喧騒する心を宥めるためのものなの。それを使ったら、ネオがぐっすり寝ちゃって。何度か試してみたら、人狼族には効き過ぎるみたいだったわ。だから、彼らの弱点は魔法だって分かったの」

「そんなことがあったんだ？」

「うん」

「お二人さん、そろそろ着くぞ」

キラの言葉を受け、僕たちは口を閉じた。目前に見えた溪谷に芽を見開く。それは獣のような形をしていた。

「あれが、獣人谷……？」

「ああ」

永遠と続いていた森を抜け、ようやく開けた場所へと出れば、すぐさま谷が見えてくる。

「狼、みたいだ……」

天へと向かう二本の先端が耳のように尖がり、その形が狼のように見える。

「あの突き出した二本の先端の間には淵がある。そこから崖伝いに登れるはずだ」

やたら地形に詳しいキラに、僕は首を傾げた。

「地形に詳しいんだね？」

「前にネオから聞いたことがある」

「なるほど」

しかし、簡単に説明がついてしまった。彼らが、昔何を話していたのかは分からない。だけど、彼らと共に過ごしている今が、とても大事な時間なのだと感じる。何の服飾もしない、それでいて輝く時間の中。僕はその中にいるんだ。

「ネオ……」

呟く名前は誰の耳にも届かない。獣人谷を見つめ、止めていた足を再び進める。

四人が揃うまで、あと少しなんだ。

## 第二十七章

谷の淵へと辿り着いた僕たちが目にしたのは、谷を飲み込もうと蠢くバグの姿だった。

「何で……」

その光景に僕たちは絶句した。しかし、そんな僕たちを余所に、バグは辺りを侵食していく。

「いったい、どうして……」

「リュウヤ、詮索は後だ。とりあえず逃げるぞ！」

僕の腕を掴むと、キラは走り出した。僕も慌てて足を動かす。

「うわっ！」

しかし、徐々に迫り来るバグに足を取られた。そのまま一瞬にして体を飲み込まれ、僕は域を詰めて目を瞑った。全身に広がる気持ち悪い感触。うつすらと目を開ければ、やはり視界は良好だ。辺りを見渡すと、リラとキラも同様に飲み込まれたらしい。しかし、リラは目を覚ましているのに、キラは眠ったように動かない。

「大丈夫。喋れるし、呼吸の出来るよ」

口元を押さえているリラに、僕は声をかけた。息が出来る事に、リラは驚いている。だけど、いつまでも驚いている場合ではない。

僕はキラの腕を掴み、彼を引きずりながら歩いていく。

「まるで水の中ね」

「うん。おかげで、キラを運ぶのにあまり苦労しないけど」

キラの重さはほとんどおない。水中のようなバグの体内で、僕たちは泳ぐように進んでいた。

「……ネオ！」

前方にネオの姿が見えた。彼は地面に突き立てられた木の柱に縛り付けられていた。

「っ！」

縛られた縄は、小さな体に食い込むほどきつく結ばれている。体

には真新しい傷が見られ、痛々しいほどだ。

「こんな、仕打ちって……」

いくらでも笑顔を向けてくれた。いつも元気に走り回っていたのに。今では、彼から生氣すら感じなかった。

『アイツらは、おれのことキライだから……』

振り向くと、リラ同様に小さなネオがいた。顔を俯かせ、いつも元気な彼からは想像出来ないほどだ。キツと顔を上げたかと思えば、憎しみに満ちた顔がそこにある。

『アイツらは……父さんと母さんを……！』

言葉が続かないのか、そこでネオは再び俯いた。耳も尻尾も垂れ下がっているが、両手だけは握り締めている。

「ネオ……」

彼の記憶が頭を過ぎる。僕はネオの記憶へと意識を集中させた。

## 第二十八章

今から約六年前。ネオは両親と三人で暮らしていた。彼の家系は一族の長を務めていたのだが、父方の兄が族長となり、ネオたちは仲間として過ごしていた。争いが嫌いなネオの父親は、兄でもある族長との争いを避けたため、人狼族は平和に日々を過ごしていた。しかし、争い事が好きな族長は何かと他の種族との闘争を起こそうとしていた。それを見かねていたネオの父は、仲間に抗議の声を上げるようになった。最初こそ耳を貸さなかった仲間たちだったが、彼の声の一部の仲間が賛同を示し始めていた。

『おとーさん、またみんなとお話するの？』

『そうだよ。ネオ、またお留守番と母さんを頼むよ』

ネオの頭を撫でる父親は、とても優しくそんな顔をしていた。頭を撫でられ、ニツコリと微笑む。いつものように父親を見送り、母親と一緒に帰りを待つだけだった。しかし、夕方になっても、彼は帰って来なかった。その代わりというように、数人の男集団が家へと押し入ってきた。

『貴方たちは誰ですか！？』

『……長の命により、貴様を……始末する！』

『っ……ネオ、逃げなさい！』

母親の腕に守られていたネオは、その人物に奥へと体を押された。『おかーさん！』

咄嗟に体を振り向かせれば、男の手が母の体を貫いていた。口から血を流しながら、母親は血の気の引いた顔でネオを見た。

『ネ、オ……にげ、なさ……い』

『おかーさん！ おまえら、おかーさんに何するんだ！』

逃げると押し出されたネオは、震えを必死に抑え込み男たちへと向かっていく。しかし、まだ幼い彼はなす術もなく捕まってしまった。

『はなせ！ おまえらなんか！』

『ガキは連れ去れ、との命令だったな？』

『ああ。全く、長の忠告を無視してまで仲間を唆すからだ』

それぞれに言葉を吐き捨てると、男たちはネオを担いだまま家を出て行く。その太く頑丈な腕の中で担がれているネオは体を捻り、母親へと手を伸ばす。

『おかーさん……おかーさん！』

しかし、少年はあまりにも無力だった。必死に伸ばす手は、求める母から遠ざかっていく。連れ去られるネオは一瞬たりとも母親から目を離さずにいた。しかし、彼女が動くことはなかった。鼻をつく鉄の臭いと、目前で焼けていく家から臭う煙。全焼していく我が家には、父から頼まれた大切なものがたくさんあった。だが、それは一瞬にして消え失せた。伸ばしていた手は力なく垂れ下がり、見つめていた目を逸らす。もう二度と、両親を見ることはない。幼かった彼は、直感的にそのことを感じていた。

男たちに連れて来られたのは、ネオの叔父である長のもとだった。

『ボス……』

叔父を見上げるネオの瞳は、憎悪の色しか映していない。幼い彼だったが、長の命令であることは理解出来た。長の命令無しに仲間を手にかけるはしない。傷つけることはあっても、だ。

『……なんで……おかーさんを……おとーさんはどこだ！？』

『お前の父、つまり俺の弟は死んだよ』

低く野太い長の声で放たれた言葉に、ネオは目を見開いた。呆然としていた彼は気を取り直すと、長に突っ込もうとした。

『っ……はなせっ！ このっ……！』

体を押さえつけられていたネオに、反撃の余地はなかった。必死に体をバタつかせるが、大の男には何の効果もない。

『お前は良い瞳をしている。どうだ？ このまま俺の跡取りにならんか？』

『は？』

長の言葉に、暴れていた体を止めた。長を見上げた瞳は瞠目していた。

『何を……』

『弟は戦を嫌っていたが、お前は……戦いたそうな顔をしている。この俺を倒し、両親の仇を取りたい、とな。だが、今のお前にはそれほど力はない。復讐のためには力を手に入れなければならない。それを手に入れるためには、どんな方法でも使うだろう。俺の息子より物になりそうだ』

ネオの頭に足を乗せ、長は彼を見下す。

『いや、だ……』

押しつぶされた顔を横に倒し、長を睨みつけて反論する。今までニヤついていた長の顔が無表情へと変わった。

『アンタが……喜ぶような……方法はしないっ！ おれは、誰かを感じせーにして力を手に入れたりはしない！ だけど、いつか、アンタを倒す力を手に入れたら、アンタにふくしゅーしてやる！』

『ほう？ ならば、生きて俺に復讐するんだな。それまでは生かしておいてやる』

ネオの反論を聞いた長は、再び嫌な笑みを浮かべた。そして、ネオを取り押さえていた男に命令を下す。

“一族追放”

ネオが受けた処罰だった。住処を追われた彼は、六歳で谷底に捨てられた。

## 第二十九章

それから彼は、生き抜くために幼い頃に聞いた交易の街まで逃げた。決して簡単な道のみではなく、街での生活も難しかった。しかし、そこでリラ、キラと出会った。お互いの過去は話してもいないし、聞いてもない。それでも、彼らは惹かれ合い、共に生きてきた。そして、僕と出会った。リラ搜索のためにキラと別れ、仲間たち連れ去られた。しかし、六年ぶりに訪れた故郷は、昔とは状況が違った。住処事態に変化はない。だが、長が変わっていたのだ。前長の息子が現長となっていた。ネオは今、この谷の淵に突き立てられた木に縛られ、飲まず食わずの状態で放置された。つまり、ネオを餓死させるつもりなのだ。

「……なんて酷い……」

目を開き、ネオへと視線を移す。彼から生気を感じないはずだ。彼が木に縛られ、飲まず食わずの状態で放置されて二日。彼らの生命力は知らないが、何かを与えなければ、ネオは死んでしまう。

「早く縄を……っ、あれ？」

彼を縛っている縄へと手をかける僕だったが、ふと頭に何かが過ぎった。それに集中させると、今度は別の記憶が流れてきた。黒い髪と耳、金色の瞳。

「キラ？」

その見覚えのある顔に、僕は眉をひそめた。後ろにいるキラへと振り向けば、幼いネオの隣に幼いキラがいた。先程までいなかったその少年に驚いたが、それ以上にキラの記憶まで溢れてきたのに戸惑った。

「今度は……キラの記憶？ リユウヤ、どうなってるの？」

それは、リラも同様らしい。しかし、それを答えるだけのものを持っていないのだ。僕は溢れてくるキラの記憶に意識を集中させた。

## 第三十章

黒髪から出ている猫のような耳がしゅんと垂れている。見た目をいえば五、六歳ぐらいだろう。そんな幼い少年はに目前にある墓をジッと見つめていた。降り続ける雨が少年の体温を攫っていくが、彼はただジッと立ち尽くしている。

『……』

周囲には同じような出で立ちの大人がいる。彼らが話す声は、少年にも届いていた。しかし、雨音がうるさいのか、微妙にかすれていく話し声。

『土砂崩れだったそうよ……をしてて……』

『まあ、……そうに……あんな小さな……残して……』

『さぞ……でしょうに……』

その声は、土足で少年を追いやっていく。しかし、そのことに周囲の人々は気付いていない。彼らの鈍感さに、ギリツと奥歯を噛み締めた。雨がなければ少年には、もっと正確聞き取れたであろう。しかし、幸か不幸か。雨の音が全てを奪い去っていく。

『キラ、悲しいであろうが、これからは両親より長く生きるのだ。ワシらも出来る限り手助けしてゆこう。強く……強く生きるのだ、キラよ』

腰が曲がり、白髪の老人が少年の隣で話しかけている。彼には大きく皺だらけの手が、小さな頭を優しく撫でた。しかし、キラと呼ばれた少年は何の返事もしない。キュツと結ばれた唇。流れない涙で潤む視界の中で、ずっと墓を見ていた。

『不幸な事故じゃった……皆の制止を振り切り、薬草を取りに行つてしまった……もっと、きつく言っておれば……』

『……長老様のせいではありません。父さんたちは病氣の子どものために、危険を承知の上で薬草を取りに行ったんです。でも、そのおかげで病氣の子どもは助かった。それが聞けただけでも良かった

……大丈夫です。オレなら、二人の分も生きていきますから」

長に返した言葉は単調的だった。しかし、それが精一杯なのだろうと思った長は静かに頷いた。長は周囲に居た仲間へ声をかけ、家へと帰るように諭す。仲間が去っていくと、長はキラへと向き直った。

『風邪を引かぬうちに帰りなさい』

『……分かっています……』

顔を動かさず、キラは小さく呟く。それから数時間が経っても、彼は一步もその場から離れなかった。

両親を亡くしたキラは、周囲の大人たちから同情され、何かと面倒を見てくれていた。だが、それを疎ましく思い始めた同年代の子どもたちから、幾度となく苛めを受けるようになった。けれど、彼は反抗も抵抗もせずに、殴られ、蹴られていた。それは彼なりの対処の仕方だった。何の抵抗も反抗もしないことが、苛めというサイクルを止める術だと思っていたのだ。しかし、彼の対処は、余計に相手の神経を逆撫でしていた。そして、ついに事件は起こってしまった。

『ナマイキなんだよ、お前！』

いつもの台詞から始まった喧嘩。否、それは一方的な暴力。その中で、小さなナイフを取り出す者が目についた。

『これでもくらえ！』

その少年は、ナイフを無造作に振り回してくる。しかし、キラに当たることはなかった。相手のナイフをしつかりと捉え、素早くその手首を叩く。その痛みに驚いた少年は咄嗟にナイフを手離れた。落ちていくナイフを地面すれすれで受け止め、いまだ手を擦っている子どもの背後を取った。細い首に銀の刃物が軽く触れる。

『ひっ！』

『刃を向ける相手を間違っていないか？』

小さな声でキラは言う。他の子どもに目を向けると、全員の顔が引きつっている。嫉妬と恐怖の色がひしめき合っている大勢の瞳。

『お、お前がワルいんだろ！？』

だが、彼らに反省の色は見受けられなかった。刃を首につきつけられている子どもさえ、恐怖より嫉妬が勝っていた。

『仲間を傷つけることより悪いことなのか？』

それでも、キラは冷たく子どもたちを一瞥する。その迫力は大人顔負けだった。

『ここから出て行け！』

『そうだ！ そうだ！』

子供たちは負けじと声を上げた。一人の声が波紋を生み、あつという間に広がっていく。その越えにうんざりしてきたキラは押さえ込んでいた少年を離し、その足下に向かってナイフを投げた。それはヒュツと空を切り、地面に突き刺さった。

『そうかよ……なら、出て行ってやる』

静かに放たれた言葉に、少年たちは啞然とした。広がっていた声は段々と小さくなり、ついには立ち去るキラの背中を無言で見つめるようになっていた。

そして、キラの姿を見る者はいなかった。

### 第三十一章

彼の記憶が頭から離れ、僕は目の前にいる幼い二人に意識を向けた。ネオとキラが囚われているのは“憎悪”だ。

「ネオ……キラ……」

何度も呼びかけているけれど、リラの時と同様に何の反応も返してこない。僕は両手を広げ、幼い二人の体を抱きしめた。

「ネオ、キラ……どうやったら、君たちを救える？ 君たちは、僕を友達だと言ってくれたのに……僕は何も出来ないのか？」

二人の体から温もりを感じない。目をギュツと瞑り、懇願するように両腕に力を込める。それでも、彼らから温もりを感じることが出来ない。

「……憎い……よな、二人とも。両親を失って……悲しむ暇もなく一人にされて。辛かったよな。失った存在は大きいのに……」

眼球が熱くなり、彼らの肩に顔を押し付けた。しかし、止まることなく涙が二人の方を濡らす。

「ネオ、キラ……リュウヤ……」

リラの声が聞えた。くぐもっていて、泣いているような声。リラにも見えたはずだ。二人の過去が。優しい彼女は、自分の痛みのように苦しみ、涙を流しているんだろう。

「目を覚ましてくれ、ネオ、キラ。お願いだ……これ以上傷ついてほしくない。あんな奴らのせいで、二人が憎んで、悲しんで、苦しみ続けるなんて嫌だ。これ以上、君たちが傷つく鵜方を見たくない！ だから、目を覚ましてくれ、ネオ、キラ！ 失ってしまった両親のために……今、ここにいる新しい家族のために……」

自分の温もりを与えるように、更にきつく抱きしめる。冷たい……死人のような二人。あんな奴らのために、二人を手放したくない。バグに飲み込まれたまま……こんな悲しい記憶を見続けたまま、二人を失うのは嫌だ。

「ネオ、キラ！」

ドクンツと脈打つ鼓動が耳に響いた。それは、まるで周囲に響き渡るように、はっきりと聞えてくる。

「ネオ……キラ……？」

微かな温もりを感じ、僕は二人を解放した。閉じられていた瞳が開き、僕たちを見つめていた。しかし、彼らの瞳から光を感じられない。それでも、二人とも必死なんだと分かった。

「ねえ、二人とも。今度は何が食べたい？ 結局食べさせてあげてなかったね。今度は作って欲しいもの言ってみてよ。頑張ってみるからさ。だから……一緒に家に帰ろうよ？ ネオ、キラ」

二人に伸ばす手。幼い二人より、少し大きい僕の手。その手を、戸惑いながらも握ってくる。二人の手を強く握り返してやった。ネオが、僕にしてくれたみたいに。そして、僕はとびっきりの笑顔で二人にこう言う。

「お帰り、ネオ、キラ」

「おう、リュウヤ」

「ただいま」

幼い二人が消え、本当の二人が目を覚ます。二人の瞳には、以前より強い光が灯っている。そして、何よりも笑っているのだ。また、いつものように。

「これで全員揃ったね、リラ」

クルツと振り返り、リラに顔を向ける。案の定、泣き崩れたリラの顔があった。けれど、彼女も満面の笑顔へと変わる。

「うん！ 帰ろう、私たちの家に！」

いつの間にかいなくなっていたバグ。遮る壁を失い、僕ら四人を太陽の日差しが体を包み込んでいく。キラがネオの縄を解き、ようやく自由の身となったネオ。リラに回復魔法をかけてもらい、多少は元気になったようだ。

「リュウヤ、帰ったら、ちゃんと作ってくれよ！？」

「そうだな。俺も食べたい料理がある。楽しみだな」

「二人だけズル〜イ！ リュウヤ、私もお願いね！」

「そんな一気に作れないって。でも、うん。作ってあげるかあら安心してよ」

「やったあ！」

大喜びするネオとリラ。キラも小さく拳を握っている。先ほどまでのことが嘘のように笑い合った。ようやく揃ったんだ。リラも、ネオも、キラも。皆、自分の過去を乗り越えた。そして今、ここにいる。その嬉しさに胸が一杯になった。けれど、それを破るように下卑た笑い声が高らかに響き渡る。その声に僕たちの喜びは吹き飛ばされてしまった。

「ソイツらがお前の仲間か？ ネオ」

急斜面から顔を出した人狼族の一人。ネオの耳と尻尾がピンツと立ち上がり、唸るように低く喉を鳴らす。

「ネオ……誰？」

睨み合っている二人の間に割り込むように、僕は声をかけた。目を向けてきたネオはさきほどと同じように、復讐に囚われた瞳をしている。

「キオン。人狼族の現・長だ」

「じゃあ、アイツの父が……」

「ああ。キオンの父親が、元・長。俺の父さんや母さんの仇だ！」  
再び人狼族へと目を向け、ネオは今にも飛び出しそうな体勢を取った。

「そつか……アイツの父親が……そして、今は、アイツのせいだ……」

「……リュウヤ？」

ネオの記憶を思い出し、僕の中でも腸が煮え返る感じがした。怒りで我を忘れそうだが、頭の中は冷えきっていた。まるで頭から水を被ったように、体温が引いていく気がする。

「リュウヤ？」

無言で前へと進み出る僕に誰かが呼びかける。

知っている。

知っている声のはずなのに……誰が呼んでいるのか分からない。

『リュウヤ!』

「っ!」

二人の声が重なった瞬間、鼓動が跳ねた。目前に黒い玉が浮んでいるのが見える。けれど、他の景色は何も見えなかった。その玉に呼ばれているような気がした。手が無意識のうちに伸びていく。そして、黒い玉に指先が触れた。その瞬間、黒い玉は空中で大きく広がり、僕の体を包み込んだ。真っ黒な暗闇の中で一つの光が近づいてくる。

「?」

その光は、僕の前で弾けた。

「やめ、ろ……」

目を瞑り、耳を塞いだ。しかし、体の内側からも溢れてくる記憶。

『ねえ、リュウヤくん。遊ぼうよ?』

「っ!」

幼い少年が目の奥で浮かび上がり、目をカッと見開いた。すると、目前にその少年の姿がある。僕に手を差し伸べてくる少年。

僕の……最初の友達。

『……』

笑っていた表情が、一瞬にして変わった。無表情のまま涙を流し、僕を見てくる。

そう、まるであの時のように……

『今日、この学校に天候してきた折原智也です。よろしく願います』

その子は転校生だった。隣の席となった彼と友達になるのに、そ

う時間はかからなかった。一緒に遊び、共に学び、最高の友達だったんだ。なのに、僕は彼を裏切ってしまった。

それは些細な始まりだった。僕たちのクラスでは仲間外れゲーというものが流行っていた。ある子を標的にし、一週間近く一緒に行動しない、または口を利かないというルールだった。一人が始めたそんなくだらない遊びが、一瞬にしてクラスに広がり、最初の餌食となったのは僕の親友。転校生で優等生。そんな絵に描いたような彼への妬みからか。今となっては下らない遊びだ。いや、遊びではなく、苛めだった。

『一番の親友だったんだ……なのに僕は……傷つけてしまった……』  
うつすらと目を開けると、数年前の自分の姿があった。顔を俯かせ、静かに涙を流している。

「……」

そんな自分を、僕はジッと見つめていた。幼い自分がゆっくりと顔を上げる。

『どうして裏切ったの？ リュウヤくん』

「っ！」

上げた顔に、彼の姿がダブリ、僕は自責の念に駆られた。目を逸らし、耳を塞げたら、どれほど楽になれるのだろうか。けれど、僕は目を逸らすことも、耳を塞ぐことも、まして無視をすることさえできない。彼は僕の友達なのに、恐怖しか感じられない。

『ねえ、リュウヤ君。僕は辛かったよ？ 友達だと思っていた君が、急に僕を無視し始めて……苦しかったんだよ？』

「うつ…… ああ……」

口から嗚咽が漏れる。口もとを手で押さえても、吐き気がわいてきた。

『ねえ、僕を殺したリュウヤ君』

「っ……！」

彼の泣き顔が目前まで迫ってきた。泣いているはずの彼の口元は薄ら笑いを浮かべている。なのに、彼の瞳は悲しみの色しか映して

いなかった。

流れていた記憶があるシーンで止まっていた。血まみれの彼の体、呆然と見つめている僕、見知らぬ大人や警察官たち。

「智……くん……？」

震える声が、彼の名を呼ぶ。けれど、彼に反応はない。見たこともないほどの血が、たくさん流れていた。

「……智也——っ！」

幼い僕の姿がダブリ、彼の名を叫んだ。それでも、彼は起きない。二度と目を覚ましはしない。二度と話すことは出来ない。彼の死の報せを聞いたのは、翌日のことだった。

『僕のせいだ……僕も一緒になってやつちやっただから……智也は死んじゃったんだ。僕のせいだ……僕が死ねば良かったんだ！』

「……違う！」「」

「……っ！？」

突如響いた声に、僕は驚いた。知っている声のはずだった。けれど、思い出せない。三つの声……とても懐かしい声。それなのに、姿は見えない。周囲を見回しても、僕以外の姿はなかった。

「違う……違うよ、リュウヤ」

「……だ、れ……？」

「お前が死んだって、智也ンイッは戻ってはこない」

「……っ……！」

「誰の代わりも出来ないんだ。リュウヤは、リュウヤだろ？」

「……ちが、う……僕は……」

両耳を塞ぎ、その声を遮ろうとした。しかし、それらの声は手すり抜けて耳に届いてくる。

「リュウヤ……あなたは私に、自分を認める勇気をくれたわ。誰もが否定した力を肯定し、受け入れてくれた。私自身を受け入れてくれた。ありがとう、リュウヤ」

「リ、ラ……？」

震える口が名を刻む。その名を呼んだ瞬間、少女の姿が脳裏を過

ぎった。尖った耳に、おっとりした表情。ニツコリと笑いかけくる笑顔。彼女を思い出すと、リラの姿が現れた。彼女は、いつもと変わらない優しい笑顔を向けてくれる。

「リュウヤ。お前は俺に憎しみ続ける悲しさを教えてくれた。急に居なくなつた両親と、一族への憎しみにかられ、自分が苦しんでいたことすら気付いてなかった俺に、お前は新たな家族を思い出させてくれた。一人じゃないんだと教えてくれた。ありがとな、リュウヤ」

「キ、ラ……」

今度は違う名前を呼んだ。黒い猫耳がピンツと立っている。いつも冷静であり表情を変えないように努力している。そんな彼を思い出した。目の前に、リラ同様にキラの姿が現れ、フツと笑って頷いてくる。

「リュウヤ。俺に追い手を思いやることを教えてくれた。一緒に涙を流してくれた。帰ろうって言うてくれた。だから、俺もお前に言うぞ。帰ろうぜ、リュウヤ」

「……ネ、オ……」

涙声で、もう一人の名を呼んだ。ネオ、リラ、キラ……僕の大切な友達で、家族。ずっと呼びかけてくれたのは智也ではなく、彼らだったんだ。

「み、んな……」

三人の揃った姿に、僕は溢れる涙が止まらなかった。そんな僕に、ネオは手を差し出してくる。

「帰ったら、何か作ってくれよ」

ニツと笑うネオに、僕はプツと噴出した。

「分かってるよ」

そう言つて、彼の手を勢いよく叩いた。パンツと良い音が響く。

『リュウヤ……君……僕を、置いていくの？』

楽しそうに笑っている最中に、幼い智也の姿が目に入った。所々が消え、まるで不安定なデータのように、ノイズを走らせながら立

ちずくんだった。胸が痛まないなんて言ったら嘘になるけど、今の僕には、その姿が何とも寂しい姿としか映らなかった。

『リュウヤ……くん……』

手を伸ばしてくる小さな少年。それは、まさに自分の姿だった。

幼い頃、彼を追い詰めてしまった自分を責め、他者に縋ることはいけないことだと決めつけ、他者との関係を断ち切ろうとしていた自分。縋る相手が分からなかった。だけど、自分を助けてくれない周囲に苛立った。そう、世の中なんてつまらないものなのだろうか、と思ってしまっただけに。けれど、本当につまらなかったのは僕自身だったんだ。自分を否定し、他者を否定し、

世界を否定した。最初からつまらなかったのは世界に対してではなく、ちつばけな自分の存在に対してだったんだ。

「……」

ようやく思い知った。彼は僕自身から生まれてしまった罪の意識。そして、自分が楽になろうと生み出してしまった悲しき存在。

幼い少年を、僕は抱きしめた。

「ごめん、智也。君を追い詰め、助けられなかった。どんなに謝っても謝りきれない。責められても仕方ない。単なる自己満足かもしれないけど……君の分も生きるから。もう、自分で自分を殺さないそれと、ごめん。今まで気付いてやれなくて。罪の意識を消すことはできないけど、もう大丈夫だから。帰ろう、リュウヤ」

『……うん……うん！』

小さな腕が僕の首を抱きしめる。不思議と、その感覚が分かった。消えていく少年は僕の中へと入り、真っ暗だった世界に光が溢れていく。その途中、ずっと思い出せなかった智也の表情が、笑いかけてくれた気がした。

## 最終章

ピピッとうるさく鳴る目覚まし時計を叩き、僕は重たい体を布団から引き剥がした。いまだ寝そうになる顔を数回叩き、学生服に手を通した。

「もう、一ヶ月になるのか……」

ふと、自分の姿を見て呟いた。それほど外見に著しい変化は見られない。強いて言うなら早起きして、学生服を着ていることぐらいだ。

「……少しは成長したのかな？」

開いていた掌をギュツと握る。

彼らと別れたのは、もう一ヶ月近くも前のことだ。

約一ヶ月前。僕は変な世界に居た。TV画面に映し出されたのは不思議な問いかけ。

“この世を捨てる気はあるか？”

あの頃の僕は捨てても良いと思っていた。世の中なんてつまらない。こんな世界に行き続けるより、捨てた方がいいと思っていた。そして連れて行かれたのは、こことは別の世界。そこでネオ、キラ、リラと出会い、彼らの過去を知った。彼らの過去は様々だったけど、共通していたのは、その辛い過去に苦しめられていた、ということ。三人とも、僕の言葉に助けられたって言ってたけど、それは僕もだった。彼らの言葉が、行動が、それまで見えてなかった自分に気付かせてくれた。何より、自分が引きずっていた思いからも解放してくれた。

罪悪感が消えたわけじゃない。

消せるはずがない。

それは、僕が犯してしまった罪。背負っていくべきもの。だから、

僕はこの世界に還って来れたんだ。

着替えが終り、僕は息を吐いた。久々の登校のせいか、やたら緊張する。

「大丈夫……もう大丈夫だから。ネオ、リラ、キラ。もう会えないだろうけど……三人は僕と共に居てくれると思っててもいいんだよね？　僕たちは……家族なんだから」

胸に手を置いて語りかけても、彼らの返事はない。けれど、思いを浮かべた三人の顔は、笑って頷いてくれた。

「うん、行ってきます！」

用意していた鞆を背負い、僕は世界へと飛び出した。ここから始まるのは僕の新しい物語。三人とは別れたけど、また新たな出会いが、きつと見つかる。

「待つてよ、二人とも！」

「ほら置いて行くぞ？」

「学校まで競争だかな！」

僕の隣を、小学生三人が横切っていく。その姿が、ふと彼らと重なった。動かしていた足が無意識に止まり、自然と目がその子たちに向く。

「三人とも待つてよ！」

「ほら、リラ。置いて行くぞ？」

「向こうの木まで競争だかな！」

彼らとの競争したのはほんの数回のはずなのに、昨日のこのように思い出せる。先頭を走るネオとキラ。その後に僕がいて、最後はリラ。

「ほら頑張つて、リラ！」

三人の中に自分の声が混じる。息も絶え絶えになりながら、僕たちは走っていた。そして、最後には四人で寝転がって笑い合っていたっけ。

「……」

不意に微笑が漏れた。彼らから目を離し、僕は学校へと足を向か

わせる。様々な音が耳に入ってくる。それは、決して統一されたものではないけれど、不快には思えない音。久しぶりの世界は、眩しくて素敵だと思える、そんな世界だった。

THE  
END  
|

## 最終章（後書き）

ようやく終了しました。

とは言っても、こういった終わり方でいいのか、微妙なものがありますが、まあ、とりあえず終了できたので良かったです。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました！

実はすでに次の小説があります。そちらはまだ書き途中なのですが、こちらより更新速度は遅くなるかと思っています。

出来るならば、そちらでもまた読んでくだされば幸いです！

それでは、またの機会でお会いすることを願っています（^^）

最後となりましたが、ここまで付き合ってくくださり、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8334o/>

---

The world of game

2011年3月9日09時55分発行